

『新女界』總目次

付『新女界』刊行一覽表

青木次彦編

この『新女界』は海老名弾正を、主幹、安井てつを、主筆、として、同じく海老名弾正が主宰する『新人』の兄妹誌とし発刊されたものである。明治四十二年（一九〇九）四月、創刊号を世に送ってから大正八年（一九一九）二月まで、約十年間にわたって、月刊雑誌として概ね順調に刊行し続けられた。そして、この『新女界』は近代日本の基督教主義の進歩的な婦人雑誌、または、所謂、女学雑誌の、一つとして、著名でありながら、現存まで、その一部分は紹介されてもいるが、その全貌は一般には知られていなかった。しかも、その完全なバック・ナンバーの現存さえ疑問視され関係者の間では渴望されていたのであるが、その全巻の写真による複製が完了したのを機会に、共同研究、海老名弾正とその周辺の総合的な研究を進める一環として、このような総目次の編集が企画されたのである。

この総目次はすべて本文に基いて、ページの順に可能な限り詳細に採録することにつとめた。談話・口述などは〔談〕、講演・演説・説教などは〔演〕とし、詩歌の類は〔短歌〕・〔俳句〕・〔詩〕と標題の上に表示した。主要標題より二字下げであるものは、小文・小品など、うめくさ的に扱われているものである。なお、原則として〔ハ〕は編者が補記したものであることを示し、（ ）は本文にあるまゝを記した。

また、付録として刊行状況が一覧できるよう『新女界』刊行一覧表を作製したが未だ検討を要する部分もあろう。さらに寄稿者索引を作製して便宜を計ることを考えてはいるが、今回は都合で見送らざるを得なかった併せておわびする。しかし、恐らく初めての試みであるこの『新女界』総目次が、今後の多面的な研究の進捗に役立てば幸甚である。

『新女界』總目次

40

鈴木 野	海老名 正	(相原 生)	藤 生	白 生	田 藤	平 訓	小山 菊	野口 せい子			田村 田鶴子 訳	金子 魁一	元良 よね子	海老名 みや子	鈴木 文治	吉野 作造	安井 哲子
39 38	34	33 33	33 33	32 32	29 26	24	23 21	20 18	16 14	12 6	5						

す○跡見花蹊	40	安井 哲	4	1	40	安部 磯雄	5	7	10	宮川壽美子	13	よ ね 子	14	金子 魁一	17	田 鶴 子 訳	19	20	21	22	内ヶ崎作三郎	25	大塚 楠男
--------	----	------	---	---	----	-------	---	---	----	-------	----	-------	----	-------	----	---------	----	----	----	----	--------	----	-------

乳母桜

〔詩〕古城趾を弔ふ

〔短歌〕菜萸萸

講壇

近代に於ける我国女性の自覚

緑陰偶想

隨感

近頃の婦人雑誌を讀みて

近來の風俗と言語

花の雪

彙報

○東京婦人会講演 ○心理学通俗講話会 ○芥種幼稚園 ○東京音楽学校春季演奏会 ○学生聯合大音楽会

編輯だより

第一卷 第四号 (明治42・7・1)

〔口絵〕河畔の朝

最も楽しき夏期休業

夏期休暇と家庭生活

思想

現代の婦人問題

夏期休業と女学生

高浜 長江 29

村山いく子 31

吉沢 香波 31

海老名彈正 32

白雲生 36

安井 哲 37

鈴木生 38

薔薇生 39

40

40

アレキサンドル・ラベン筆

安井 哲 1

4

浮田 和民 5

麻生 正蔵 7

うるさい子供

星(小説)

詩二篇 囚人

飢渴

如何なる童話が最歡迎せらるるか

伯父さん(小説)

運動ちがひ

講壇

良心の覚醒

緑陰清話

雜録

今年の夏 一

二

海水浴に就て

病める友の疑問に答ふる書

彙報

○東京婦人会講演会 ○心理学通俗講話会 ○基督教女子青年会夏期講習会

編輯だより

第一卷 第五号 (明治42・8・1)

瑞西国リギ登山記

思想

倉橋惣三(演) 11

藤 なみ子 16

激 橋 20

〔同 右〕 20

石野為之助 21

平山 訓子 25

29

海老名彈正 30

海老名彈正 33

海老名みや子 35

元良よね子 35

金子 魁一 36

小日向生 38

40

40

海老名彈正 1

40

137

アルプス登山の追懷	安井 哲	4	無題録	(愛)	6
海の光	谷津 直秀	8	思想		
天照大神と日本婦人	赤星 仙太	11	女子高等教育に就て	元良勇次郎	7
海より	大塚 楠男	14	女性の逆理(女性を理解する秘鑰)	村田 勤	8
日本に於ける夏の経験	コーツ夫人談	18	修養瑣談	野口 末彦	13
老癡兵	くすお	22	米国男女学生々活	谷津直秀(談)	15
ブース夫人傳を読む	薔薇園主人	25	少女日記 一	(持地武子)	18
文苑	松川 信男	31	家庭		
〔短歌〕月光	佐藤 茂	31	今年の我が避暑生活	海老名みや子	19
霹靂			妻としてのモ子カ	聖 山 生	22
講壇			少女日記 二	(貞 子)	24
自然の児	海老名彈正	32	文苑		
無冠の女王		35	ゆきあたりばったり集	内ヶ崎作三郎	25
雑 録			その夜	藤 なみ子	28
子供と金銭	某 夫人	36	少女日記 三	(武 子)	34
女学生と誘惑	(一記者)	37	講壇		
編輯だより		40	限りなき生命	海老名彈正	35
新刊紹介		40	雑 録		
○『小児母の手引』柳瀬寛次郎著			他人の所有物の取扱に就いて	安井 哲	38
○『救急』			少女日記 四	(武 子)	39
第一卷 第六号 (明治42・9・1)			彙報		40
現代女子のたしなみ	海老名彈正	1	○大阪の大火○江濃の地震○渡米実業団○婦人矯風会の活動○婦人倶楽部		
一時的な生活と永遠の生活	安井 哲	4	編輯だより		40

第一卷 第七号 (明治42・10・1)

泥棒根性の撲滅	海老名彌正	1
周囲の人に親切なれ	安井 哲	3
思想		
輓近女学界の趨勢に就て	宮田 脩	7
物を遣る心得	吉野 作造	9
妾の過去	矢島 楫子	13
姉様へ	(妹より)	15
家庭		
家庭教育觀察の一二	安井 哲	16
子女教育に対する母の務	海老名みや子	18
流行せる脳脊推膜炎の話	金子 魁一	22
文苑		
うたかたの記	松井とも子	23
(新体詩)我等は七人	(ラース・ラース作)	26
	萩畔生訳	
痲痺したる良心	澁 橋	29
(短歌)海より	松川 信男	30
みちのくの旅	野口せい子	30
講壇		
人間の教養	海老名彌正	31
雑録		
家庭学校を訪ふ	一記者	35

人相談片

編輯だより

第一卷 第八号 (明治42・11・1)

家庭の感化と基督教	安井 哲	1
(短歌)一首	(通 治)	5
お笑ひ草	(元良よね子)	5
思想		
宗教的素養		
婦人發展の新局面	宮川經輝(演)	6
家庭	島貫兵太夫(談)	11
加納家家人の心得	安井 哲	14
健康は天の特賜	元良よね子	15
子女教育に対する母の務 二	海老名みや子	17
治療し得可き不具	金子 魁一	19
文苑		
乞食心	ゴリーキ(作)	21
	無繋生(訳)	
日向葵	ハーン(作)	25
	高浜長江(訳)	
基督信者のなさけ	エルンスト・フォン・ハウハルド(作)	27
	大塚楠男(訳)	
(短歌)花藻	田沢 藤郎	32
我が心	侃 四郎	32
最上 宏		38

講壇

弱者の勝利

海老名彈正 33

雑録

妙華園を訪ふ

一記者 36

日本の家庭に嫁したる英国婦人の経験談

(一記者) 38

彙報

○新女学生訓十則なる○宣教紀念婦人会○香柏会発会式○
組合総会婦人大会○慈善演芸会

40

編輯だより

40

第一巻 第九号 (明治42・12・1)

真に教育ある婦人

安井 哲 1

思想

女子教育に就て

浮田 和民 5

先づ小事に忠実なれ

宮川すみ子 8

運動と性格

海老名一雄 10

偉人の誕生

栗原 基 13

家庭

孝子基督

赤星 仙太 15

加納家人の心得(継ぎ)

安井 哲 17

子女教育に対する母の務(其三)

海老名みや子 19

文苑

ゆきあたりばったり集

内ヶ崎作三郎 23

〔戯曲〕聖誕(一幕)

秋生 訳 25

〔新体詩〕さすらひ

佐藤 澁橋 31

信頼〔二篇〕

楠男生〔訳〕 31

講壇

快活なる生活の秘訣

海老名彈正 32

〔俳句〕一句

(斗 外) 35

二つの会話

ロバルト・ライニック 35

雑録

聖誕祭と弱者

山室 軍平 36

編輯だより

(野口せい子) 39

第二巻 第一号 (明治43・1・1)

〔口絵〕童貞

アザンブル筆

如何なる覚悟を以て新年を迎ふ可き乎

安井 哲 1

思想

女子教育所感三則

西島 富壽 5

あかん坊の話

倉橋 惣三 8

冷い風

鈴木 千賀 13

〔詩〕聖母に

(ボウトレール〔作〕
高浜長江〔訳〕)

14

〔短歌〕椰子の木蔭

田沢 藤郎 15

愛読の書と青年子女に推奨す可き書籍に対する諸先輩の開書	16
○齋藤きえ○宇佐美敬○宮田脩○西島富壽○上代淑○下田次郎○小林彦五郎○松浦政泰○進藤よね○伊佐早梅子○平野はま○伊吹岩五郎○柳井道民○天野みち	
本誌に対する批評	
家庭	加藤 直士 21
子心	齋 藤 生 22
親心の教養（子女教育に対する母の務 其	海老名みや子 24
四）	金子 魁一 26
治療し得べき不具（前承）	鈴木 衡平 28
『味の素』の話	
講 壇	海老名名正 31
基督の家庭	
雑 録	村 田 勤 34
本誌に対する批評	栗原 基 34
	有富虎之助 35
	杉 山 恒 35
	山 里 賤子 36
一	海老名名正 38
二	安井 哲子 38
三	元良よね子 39
四	海老名みや子 40

第二卷 第二号（明治43・2・1）

親の愛	安井 哲 1
想 苑	
滞欧所感	佐々木吉三郎 4
吾国家庭の飲陥	桜井 鋤子 8
新人（お伽話）	隣 花 稿 11
孤島生活の一日	藤 郎 15
家庭	藤堂忠次郎 19
虐待に勝ちし婦人	海老名みや子 20
新らしき武装	金子 魁一 24
何故に感冒は恐るべきか	な を 子 25
家庭に於ける信仰	長尾いと子 25
肌着の裁ち方	
講 壇	海老名名正 27
現代女子の宗教	
雑 録	
雑誌瞥見	31
△家庭を同情の発現所となせ 佐治実然（警世）△女子に對する男子の礼儀 三輪田元道（警世）△進んで努力すべき時 沢柳政太郎（婦人くらぶ）△宗教の根柢が無くては完全なる教育は施されない 麻生正蔵（家庭之友）△食事に籠りたる情味を解し得ざる市民 東郷昌武（婦人くらぶ）△初生児の扱ひ方 桜井妙子（家庭之友）△婦人と洋画	

吉田ふじを子(新小説)△流行の髪 桑島千代(新小説)△
家庭暦をお作りなさい(家庭之友)

随感

一 安井 哲 35
二 元良よね子 35
相 原 生 36
坂 手 宗市 37
鈴 木 生 38
元良よね子 39

たまだれ 40
彙報 40

○女子教育会○第八回心理学通俗講話会○野口末彦氏○吉

野作造氏

新刊紹介

○『相愛記』黒瀬二水著 興楽房発行○『忘れな草』紫園

山人訳 民友社発行

第二卷 第三号 (明治43・3・1)

神を畏れよ

渡米して得たる感想

想 苑

婦人に関する欧米の諸問題

家庭の勢力

ゆきあたりばったり集

安井 哲 1
澁澤男爵夫人 3

三沢 糾 4
江原 素六 9
内々崎作三郎 15

はきちがひ
少年僧正を読む

家庭

友誼
幼年時代の教育(子女教育に対する母の務
其五)
マッサージの話

講 壇

野口精子の君を送る

家庭に於ける宗教

雑 録

予が旅行中に見たる種々なる女性

牛乳のうすめ方

編輯だより

第二卷 第四号 (明治43・4・1)

結婚の真義

端嚴なる姿勢 田代義徳(時事)

想 苑

古代独逸人の間に行はれし一夫一婦の美風

月と恋愛

生物進化の話

絶島の半日

安井 哲 1

村田 勤 5
三沢 糾 9
谷津 直秀 17
ふぢらふ 21

如意生訳 18
孤 峰 20

三谷 民子 22

海老名みや子 24

金子 魁一 28

(楠 男生) 29

海老名彈正 30

栗 原 基 35

加藤 照磨 39

(野口せい子) 39

家庭	日記の効を知りたる私の実験	元良 よね	26
	米国教育家の児童教育意見(ハ・ヘンリーリチヤグ氏論文抄訳)		27
講壇			
道徳の基礎		海老名彈正	30
雑録			
摘草集(新聞雑誌瞥見)			34
△女子解放の声 井上哲次郎(斯民家庭)△女子と技芸 谷紀三郎(時事)△裁縫教師の人格(時事)△新案の貯金法 某夫人(婦人界)△煮た牛乳は役に立たぬ 一木謙三(衛生新報)			
時事その折々			36
△新政党の樹立△未成年者飲酒取締法案△訪問客と其言語(一記者)△子女教育上の覚悟			
編輯だより			40
第二巻 第五号(明治43・5・1)			
処世の覚悟		安井 哲	1
新刊紹介			4
○『イートン学校及其校風』本田増次郎著 内外出版協会			
○『ジョン ハワード言行録』森近運平編著 内外出版協会			
会○『ロビンフッド物語』文学士 近藤敏三郎訳編 内外			

出版協会	現代の女子教育に就て		
想苑	地久節と日本婦人の理想		
	ゆきあたりはったり集		
	追懷の村		
〔詩〕自然の姿			
秋の姿			
家庭	女学生方に望みたき事共二三	川島 芳子	20
	患難に処するの心得	海老名みや子	22
少年と読物		杉村 幹	25
講壇			
人生難に処するの道		海老名彈正	27
一口噺			
雑録			
〔新聞雑誌瞥見〕			
△不良少年と家庭 伊沢修二(東京日々)△芸者を要求する社会と婦人 宮田脩(婦人画報)△米国の家政学 井上秀子(家庭)△猩紅熱の経過 加藤照磨(婦人世界)△金魚の手輕い飼養(時事)			
時事その折々			34
△羅馬法王とロオズベルト氏 △日韓合邦問題の成行△学制改革案の審議			
			31
			30
			27
			5
			7
			10
			13
			18
			19

北清見聞記

随感

不良学生と家庭の事情

嗚呼精忠義烈の人

編輯だより

片山 幽吉 36

電車処娘

(某夫人) 26

講壇

現実生活に於ける信仰

みむね

海老名 彈正 信子 27 30

雑録

ミス、テップスを訪ふ

欽 泉 生 31 34

摘草集(新聞雜誌瞥見)

責任ある言行

想 苑

女学界の現状と女子の覚醒

慈愛館を訪ふ

〔詩〕豊玉姫の独白

ユダヤの女

欺の理想

おあひなさった違ひ

〔詩〕月見草

〔短歌〕山の色

家 庭

子女教育に対する母の務(其七)

似て而して非なるもの

応急手当法

安井 哲 1

宮田 脩 4

一 記 者 7

浅山 尚 11

(アナトール・フランス作)
別所梅之助訳

12

鈴木 重信 17

せ い 子 18

海老名みや子 19

元良 よね 22

小山 憲佐 24

講壇

現実生活に於ける信仰

みむね

海老名 彈正 信子 27 30

雑録

ミス、テップスを訪ふ

欽 泉 生 31 34

摘草集(新聞雜誌瞥見)

△基督教と我女子教育 西山慈治(教育学術界)△子供に對

しては一家同一主義をとれ 黒沢逸郎(警世)△台所で改良

したいと思ふ点 宮川壽美子(婦人画報)△嬰兒と副食物

加藤照磨(婦人世界)△油虫の駆除法(婦人之友)△婦人の職

業としての養鴨(時事)

〔新刊紹介〕

○『歌いろは唱歌』小波山人補 崇文館発行○『日曜学校

お伽草紙』原正男訳編 内外出版協会

投書欄

○青葉若葉 里の子○妹を憶ふ 野菊○精神の修養 紫女

○日曜学校の先生 白百合

随感

母親の權威

寸感録

安井 哲 39 39
相原 一郎 介 39

第二卷 第七号 (明治43・7・1)

廣く人に接せよ	安井 哲	1
不朽の人格	海老名 正	4
涼しき慈善 (新鮮空氣団の話)	倉橋 惣三	8
ゆきあたりばったり集	内々崎作三郎	11
如何にして暑を消す可きか	元良 よね	15
漁村の幸	菊野 女史	17
割烹は最良の消夏法	嘉悦孝子(談)	22
ユダヤの女	(アナトール・フランス)	24
	別所梅之助訳	24
新刊紹介		27
○『家庭看護法』児玉修治述	内外出版協会発行○『お伽草紙』紫田流星著	教文館発行
信仰美談	渡瀬 常吉	28
我国女性の消息文	海老名 一雄	32
夏の伯林	中村 春雨	37
磐手山、八ヶ嶽登山記 (高山植物の採集)	野口ゆか子	40
「シヤムの避暑」	安井 哲	45
靈性の満足	宮川 經輝	48
消夏の方法に対する諸先輩の開書		51
○村田勤○宮田脩○下田次郎○桜井ちか子○赤星仙太○成瀬仁蔵○嘉悦孝子○川島芳子○向軍次○矢島樺子○弘田増		

子○吉村里子○伊吹岩五郎○斎藤きえ子○加藤直士
新刊紹介

○『怪談』小泉八雲著 高浜長江訳 すみや書店發行
安部磯雄著 北文館發行

○哀れなる少女 野菊○海の黙示 芝乃○笑話 むらさき
編輯だより

第二卷 第八号 (明治43・8・1)

〔口絵〕路辺の水たまり	安井 哲	1
打ち解け主義	谷津 直秀	3
湯台叢話 其一	海老名 正	4
慎独の妙境	本田増次郎	7
夏の欧米	有馬 憐花	11
登美ちやんの日記	海老名 正	14
自然と小供(子女教育に対する母の務 其八)	谷津直秀(談)	18
ハープスウェルの夏	聖山 生	20
二通の結婚祝賀状	浅山 尚	23
〔詩〕赫耶姫	テニソン(作)	23
〔詩〕砂洲越えて	欽泉生(訳)	23
私の下女に就ての心得	某夫人	24
清国人の結婚式	片山 幽吉	27

田園生活の一模範

瀬谷 孤浪

摘草集(新聞雑誌瞥見)

33 29

△断えず小児に仕事を与ふる工夫 甲賀藤子(家庭)△理想

的避暑生活 高島平三郎(時事)△小児の飲料 加藤照麿(婦

人之友)△夏向の菓子「黄金羹」 桜井ちか子(婦人画報)△

最も効能のある蚤の駆除法 宮島幹之助△衛生上の適否

北里柴三郎△茄子の山かけ 桑原東浪

無意味の贈答

安井 哲子

親切

海老名みや子

境遇と影響

(信)

婦人の職業問題

(楠 男生)

新刊紹介

○『当世細君気質』佐々木邦訳述 内外出版協会発行

編輯だより

同人消息

第二卷 第九号 (明治43・9・1)

「婦人の理想」を読む

安井 哲

講 壇

ヤコブ、マリヤの母

海老名彈正

欧米見聞記(夏の欧米 其の二)

本田増次郎

聖書に見えたる婦人

口村 佶郎

第二卷 第十号 (明治43・10・1)

勤勉なれ

安井 哲

ナイチンゲールの面影 村田勤(家庭)

講 壇

日韓人の同化

海老名彈正

子女教育に対する母の「務」 其十(老

人に対する同情)

海老名みや子

スミス大学と校長シーレー博士

形 影 生

斜めに視たる家庭

一色 醒川

小供と虚言(子女教育に対する母の務 其

九)

海老名みや子

「短歌」とはの夢

せい 子

湯台叢話

谷津 直秀

不思議な邂逅

元良 よね

北清見聞記(清国人のマモニズム)

片山 幽吉

水害救助手伝雑誌

瀬谷 孤浪

逗子みやげ(九十歳の高齢になられる徳富

先生の修養)

鹿子木津也

随感

孝子田孝子林

(楠 男生)

編輯だより

40 39

愛の神秘	口村 信郎	15	有珠の噴火を見る	野の 人	18	秋の花	無 繁 生	23	湯台叢話 (其三)	谷津 直秀	24	北清見聞記 (清国人の食道楽)	片山 幽吉	25	両毛の三日	和田 信次	27	〔詩〕洪水	あけぼの	32	摘草集 (新聞雑誌瞥見)		33	△西洋文明の特色 高橋順次郎(婦人画報)△神経的な児童教育 倉橋惣三(時事)△科学上より見たる月 一戸直蔵(婦人くらぶ)△小児の腸胃の病氣 加藤照麿(婦人之友)		35	時事其折々			○日韓合邦後のくさぐさ○巴爾幹諸邦の風雲○清国資政院の開院○千里眼婦人御船千鶴子の出京○台湾蕃族の討伐			随感			子供の自尊心を傷ふ勿れ	安井 哲	38	無慈悲なる母親	〔楠 男生〕	38	鑄形的女性	〔楠 男生〕	39	編輯だより		40	第二卷 第十一号 (明治43・11・1)			独立と調和	安井 哲	2	湯台叢話 (其四)	谷津 直秀	4	講 壇			現代婦人の覚悟	海老名 正	5	折拂の力	村田 勤	9	ゆきあたりぱったり集	内々崎作三郎	12	秋の空	無 繁 生	16	独り子の教育に就て (子女教育に対する母の務 (其十二))	海老名 正	17	イマヌエル行	田沢 藤郎	20	独力よく一町の信仰を支えし老女	鹿子木 つや	25	十四年ぶりの旅路日記	海老名 正	28	摘草集 (新聞雑誌瞥見)		31	△妊婦保護所の必要 小河滋次郎(婦人画報)△禁酒と婦人島田三郎(時事)△病人の食物 秋穂益実(時事)△小児の貧血症 加藤照麿(婦人世界)			時事其折々		33	○葡萄牙革命○戦艦「河内」の進水○工場法案の公表○波斯の騒乱			随感			目前の利害を超越したる生活	小此木 松子	37	後れ行く母親	〔楠 男生〕	37	通信		39	○日本婦人伝道会		
------	-------	----	----------	------	----	-----	-------	----	-----------	-------	----	-----------------	-------	----	-------	-------	----	-------	------	----	--------------	--	----	--	--	----	-------	--	--	---	--	--	----	--	--	-------------	------	----	---------	--------	----	-------	--------	----	-------	--	----	----------------------	--	--	-------	------	---	-----------	-------	---	-----	--	--	---------	-------	---	------	------	---	------------	--------	----	-----	-------	----	-------------------------------	-------	----	--------	-------	----	-----------------	--------	----	------------	-------	----	--------------	--	----	--	--	--	-------	--	----	--------------------------------	--	--	----	--	--	---------------	--------	----	--------	--------	----	----	--	----	----------	--	--

△婦人信徒大会 三宅夏子△神戸教会婦人会
編輯だより

第二巻 第十二号 (明治43・12・1)

先づ吾身を他人の位置に置け	安井 哲	2
講 壇		
力の宗教	海老名彈正	4
小供に小使をやる可否と其注意		8
▽月給制度で小使を遣る	金森 夫人	8
▽子供の性質を考へて遣る	某 夫人	10
母が示してくれし人生	兵働 秋郎	12
「臘夜の月」(野中婉子の書)	森田 蘇泉	14
十四年ぶりの旅路日記(其二)	海老名みや	17
星を尋ねて(小女宗教歌劇)	浅田 泰順	22
北清見聞記(支那料理の献立)	片山 幽吉	24
冬の衛生実験談	海老名みや	27
湯台叢話(其五)	谷津 直秀	29
摘草集(新聞雑誌瞥見)		30
△冬着買ひ方の参考 斎藤春代(婦人之友)△経済になる炭 (新民家庭)△台所と「アスファルト」 西村寅三(婦人画報)		
△暖爐を何な風に使ふか(国民)		
時事其折々		32

○暹羅皇帝の崩殂○米国の総選挙○現内閣の二大問題○清
国の政局難○南極探検隊乗船「開南丸」の出帆○文豪トル
ストイ伯の長逝

随感

今少し遠大の処に着眼せよ

夫婦同化の真義

多忙なる生活

新刊紹介

○『小公子』藤井繁一訳 聚星堂発行○『家計簿』羽仁も
と子編 婦人之友社発行○『日曜母のゆくへ』百島操訳編
内外出版協会発行○『新家計簿』一家屋の友編輯局案 内
外出版協会発行○『実用家計日記』佐治実然案 内外出版
協会

編輯だより

第三巻 第一号 (明治44・1・1)

〔口絵〕ヴェニス貴婦人	安井 哲	1
死ぬまで働き続ける元氣		
講 壇		
現代婦人の飲陥	海老名彈正	4
想 苑		
吾国女学生の惡傾向	小此木まつ子	13
新刊紹介		10

『新女界』総目次 ③1—③2

○『柊山のくりすます』毛利薫訳 警醒書店発行○『犬のはなし』大宮季貞編 警醒書店発行	三谷 民子	14
礼儀の根本觀念	海老名一雄	17
巫米利加だより	上村 邦良	24
降誕祭七ツの徳	野口せい子	29
対話	谷津 直秀	29
〔短歌〕木枯の朝	倉橋 惣三	31
湯台叢話(其六)	海老名みや	35
徳富健次郎氏來書〔海老名夫人宛〕	醒 川 生	39
子供の考	谷津 直秀	40
家庭	楠 男 生	42
子供の友の心配	宮田脩(婦人画報)	44
肉体美と精神美	△常識の飲乏	
涓滴録	中川謙次郎△呼吸病の注意 山本恵三(婦女界)△福寿草と雪割草(時事)△毛髪の注意(斯民家庭)	47
鰻の話	時事その折々	
留守宅御見舞の記	○英國の政局○清国婦人の活動○閑院宮西殿下の琉球御成○教界物故の諸名士	
摘草集(新聞雑誌瞥見)	隨感	

第三卷 第二号(明治44・2・1)

所感二則	安井 哲	50
贈答の心得	海老名みや	52
雪路の灯	楠 男 生	53
編輯だより		55
社説	安井 哲	1
無意識の感化	海老名彈正	4
講壇	谷津 直秀	9
永遠の生命	徳富健次郎	10
想 苑	白鳥 健	15
かあやん	小山 東助	21
黒砂の孝女	片山 幽吉	25
現代小説雑誌	グリム(原作)	29
清国人のお正月	くすを生(抄訳)	
白雪姫	孤 峰 生	35
小さい同情	宮川壽美子	36
家庭	某 夫 人	39
幼年時代の宗教々育		
完全なるお手本		
父母よりも神様		

幼時より宗教々育を施すべし (子女教育に対する母の務 其十二)	海老名みや	41
家庭に於ける亡父の平生	小林富次郎	46
時事その折々		49
○露独協約の成立○カーネギー翁の寄附○帝国議会の開会		
○村松前代議士夫妻○無政府主義者の判決○千里眼婦人の毒死		
〔新刊紹介〕		51
○『慈愛の涙』村田勤編 京新商会発行 (楠男生)		52
摘草集 (新聞雑誌瞥見)		53
△本邦の結婚と離婚 (東洋時論)		54
〔新刊紹介〕		
○『真澄の鏡井上通女』岡田辰次郎 神井虎夫共著 同文館発行		
随感		
病院より	元良よね	56
編輯だより		
第三巻 第三号 (明治44・3・1)		
社説	安井 哲	1
個人の歴史		
講壇		
恩恵の声	海老名禪正	4

湯台叢話 其七	谷津 直秀	9
想苑		
独逸見聞記	吉野 作造	10
愛の鞭	額 賀 生	20
見果てぬ夢 (前橋新人社講演会の記)	野口 せい	23
朝鮮の婦人	高橋 直巖	28
〔短歌〕スノードロップ	田沢 藤郎	31
桜	不 喚 生	32
家庭		
学校の撰択	向 軍 治	33
質素な学校	某 夫 人	41
行き届いた学校	某高等官	42
幼時の宗教教育 (日曜学校について)	井 深 夫人	43
家庭雑感	某 夫 人	44
子女教育に対する母の務 (其十三)	海老名みや	46
随感		
若き時の奮励	安井 哲	52
思出の一節	海老名みや	53
編輯局より		
第三巻 第四号 (明治44・4・1)		
社説	安井 哲	1
奮斗と慰安		

『新女界』 総目次 ③4—③5

講壇	柔和の福音	婦人解放の是非	佐久間大尉の手紙	独逸見聞録	ヤンキーガール	〔短歌〕砂の上より	四角な口	家庭	子女教育に対する母の務 其十四	卒業と結婚	亡き夫の想出	家庭衛生談（青児に就ての注意）	〔新刊紹介〕	○『國民と非國民』 民友社發行	婦人の力	時事その折々	○南北朝正閏問題	随感	音聲と言語	多忙なる人の心がけ	湯台叢話 其八	編輯局より
----	-------	---------	----------	-------	---------	-----------	------	----	-----------------	-------	--------	-----------------	--------	-----------------	------	--------	----------	----	-------	-----------	---------	-------

海老名彈正	4	宮田 脩	9	徳富健次郎	13	吉野 作造	21	海老名一雄	29	せい子	34	不 喚	35	海老名みや	36	赤星 仙太	40	小林あや子	44	弘田 ます	47	48	桑木 厳翼	49	50	海老名みや	53	安井 哲	54	谷津 直秀	55	56
-------	---	------	---	-------	----	-------	----	-------	----	-----	----	-----	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	----	-------	----	----	-------	----	------	----	-------	----	----

第三卷 第五号（明治44・5・1）

社説	他人の喜びに対する同情	講壇	誤解せられたる基督	想苑	矯風問題	之れ実地の問題	公唱全廢論	慘ましき國家の矛盾	誘惑物を撤去せよ	女子をして強からしめよ	続あめりか便り	戯塔の少女	母の詩	小さき家の日記	夕の春	〔新刊紹介〕	○『如何に家政を整理すべきか』 佐治実然著	会發行	家 庭	高等女学校卒業後婚嫁迄の子女の教育を如何にすべき乎	安井 哲	1	海老名彈正	4	島田 三郎	9	山室 軍平	12	宮田 脩	17	斯波 貞吉	18	高島 米峰	19	海老名一雄	21	みをつくし	26	藤田 鈍物	33	小川 あい	36	菜 の 花	37	37	内外出版協	38
----	-------------	----	-----------	----	------	---------	-------	-----------	----------	-------------	---------	-------	-----	---------	-----	--------	-----------------------	-----	-----	---------------------------	------	---	-------	---	-------	---	-------	----	------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	----	-------	----

家庭を持つ修行	弘田 ます	38
総ての土合なる頭脳を養ふ事が肝要	元良 よね	39
高等教育を受けさせたい	某 夫人	42
親と子	額賀鹿之助	43
姉様へ	露	47
最も憐れな人	み や	50
時事その折々		51
○清国の借款成立○清国の幣制改革		53
新刊紹介		
○『女の心』高島平三郎著 洛陽堂発行○『主日』矢口シクル		53
ピカステス原著 普光社発行		
保次郎訳		
随感		
真にお芽出度こと	海老名みや	54
極度の内気	安井 哲	55
編輯だより		56
第三卷 第六号 (明治44・6・1)		
社説	安井 哲	2
趣味のいろく	(一 記者)	4
皇太子妃殿下の御病氣		
講壇	海老名彈正	5
女子の解放		

新刊紹介		
○『女子商業講義』第一年第一号		
想苑		
女子教育の標準	村田 勤	10
見えぬ力	和田 孤峰	14
おきのさん	平山 訓子	18
日誌の中より	雛 菊	21
覚え帳より	はく や	25
ハ短歌」人のうつくし	野口せい子	26
家庭		
家庭に対する希望		
先づ退きて反省すべし	みどり	28
自己が中心	若 葉	30
父母たる自覚を充分に持つて頂きたい	山本たけ子	31
老人に対する要求	かほる	33
新しい女より世の親達へ	波 子	34
机上の空論	何の実験もなき一女	34
宗教心の欠乏と解放主義の無意義	岡崎 小文	35
制度よりも精神が肝要	武 鈴江	37
舅姑への希望	十八 公女	38
結婚について	みどり	39
子女教育と現代思想の解釈	海老名みや	41
男子の我儘論	俊 子	46

『新女界』総目次 ③6—③8

時事その折々	48
○墨西哥革命の因果○清国新内閣の成立○仏国陸相の惨死	
随感	
習慣にとらはるる弊	
さまざまなる欺待振	
若葉のかげより	
白つゝじ	
編輯だより	56
孝子	55
千香女	53
安井哲	52
海老名みや	51
第三卷 第七号 (明治44・7・1)	
過ちて改むるに憚ること勿れ	
浄心録(一)	
講壇	
受苦の真義	
ベビーの教義問答	
想苑	
婦人の活気	
伊香保より	
インディアンバンド	
夏季の衛生法	
〔短歌〕雲の枕	
網膜の夢	
天路のはて	
安井哲	1
谷津直秀	4
海老名彈正	5
斎木仙酔訳	11
小此木松子〔演〕	12
野口せい	15
野の人	17
小山憲佐	21
せい子	25
田沢藤郎	25
大石秋華	26

家庭	
父母より娘へ(前号所載若き女子の「家庭	
に対する希望」を讀みて)	
『家庭に対する希望』を讀みて	
結婚問題	
現今の女学生	
敬愛なる若い姉妹方へ	
信仰は總ての要求を容れて余りあり	
家庭に対する希望	
貴い疲労	
男子方の自重を望む	
随感	
避暑の一ヶ月は家庭教育の最好時機	
計り難き人の身の上	
祈禱の力	
編輯だより	
第三卷 第八号 (明治44・8・1)	
神の聖愛	
〔新刊紹介〕	
○『女学校出の女子』西山惣治著 内外出版協会発行	
形式道德の無勢力	
結婚問題(其二)	
村田勤	27
深田憲治	31
某文学博士夫人	37
海老名みや	40
小崎千代子	45
紫嵐	47
かほる	50
海老名みや	53
元良よね	54
一記者〔訳〕	55
編輯だより	56
海老名彈正	1
神の聖愛	
〔新刊紹介〕	
○『女学校出の女子』西山惣治著 内外出版協会発行	
形式道德の無勢力	
結婚問題(其二)	
村田勤	7
深田憲治	11

三十年前宮川牧師の訓誡

土耳其の話

名古屋藩の青松葉事件（渡辺新左衛門夫人の事）

清国婦人の将来

シモンの父

〔短歌〕母の日

夏の色々

懐かしい十年前の夏

恵み多かりしふた夏

夏の巴里

西班牙の夏

逗子より

随感

現代婦人の地位

編輯だより

第三卷 第九号（明治44・9・1）

〔社説〕

温情

講壇
〔ボストン女教員ストライキ〕

海老名みや

小松 武治

東南 生

片山 幽吉

（モパッサン（作）
丸山英一（訳）

野口せい子

安井 哲

三谷 民子

藤島 武二

湯浅 一郎

孝 子

石 人生

56 53

52 51

49 45

42 42

40 31

25 22

19 15

向上の動機

〔想 苑〕

常楽の生活

女子農業教育に就て

病床雜観

避暑地より

避暑日誌

呑気な生活

赤城紀行

可愛らしいお手紙

〔短歌〕黄昏の海

家庭

子女教育に対する母の務（其十五）

家庭改良瑣談

家庭に於ける父親の責任

摘草集（新聞雜誌瞥見）

△避暑戻りの注意 弘田長△胃腸と食物

の使ひ方△独逸女学生の昼寝 藤山治一（婦人世界）△学

校着としての洋服（婦人の友）

随感

家庭に於ける青年の取扱

所謂現代的女性

編輯だより

海老名彈正

二宮 貞子

長崎 発生

額 賀 生

海老名みや

元良 よね

九里 原生

一 記 者

大石 秋華

海老名みや

谷津 直秀

一 記 者

50 47

45 42

41 39

33 29

23 23

19 14

10 5

53 54

56 54

56 54

第三卷 第十号 (明治44・10・1)

〔社説〕	勇氣	講壇	家庭の基督	想苑	婦人と信仰	『フラウニング』の『アンドリヤ、デル、サート』を読みつて	無題録	女子の高等教育に就て	文苑	貞様	〔短歌〕草の実	雑録	東京の貧民窟	愛生産院に就て	原町に住むの記	新刊紹介	○『子供の権利』田村直臣著 警醒社発行	家庭	時代の変遷と母親の覚悟	子供の復習に就て
	安井 哲		海老名 彈正		海老名 彈正			ジョルタン博士(演)		しのぶ	野口せい子		坂本龍之輔	金子 貞子	聖 山 生				海老名 みや	西嶋 富壽
	1		5		12			21		23	31		32	38	41	44			45	48

第三卷 第十一号 (明治44・11・1)

随感	我を忘れて尽す精神	親しい間柄は名を呼びたい	煩悶相談部の新設	林町より																
	安井 哲	海老名みや	海老名みや																	
	52	53	55	56																

家庭衛生大意

時局二題

○伊土戦争○清国の革命運動

随感

絵の生涯

これからの奥様は

煩悶相談部より

小山 憲佐

50 47

道理以上

〔詩〕子供の歌園

家庭

子女教育に対する母の務（其十七）

家庭衛生大意

時事その折々

○支那の革命○小学校長の優遇○朝鮮の教育勅語○春雨艦の沈没○練習艦隊の出発○暹羅皇帝戴冠式

随感

夫婦の情味

最高の奉仕

悲しむべき靈魂

「わたし」と云ふ字

林町より

ステープンソン〔作〕

赤星生訳

海老名みや

小山 憲佐

49 46 42

(みや子)

(りき子)

(きよ)

(きよ)

56 55 53 52 51

第三卷 第十二号 (明治44・12・1)

〔社説〕

心の準備

教壇

基督教の真髓

想苑

世界最大の美

早起と花

男女問題の宗教的意義 (二)

米国家庭の特質

雑俎

信子の父様

珍しき改悔談

病床日記より

安井 哲

1

海老名弾正

5

宮川經輝〔演〕

11

安部 清蔵

細倉 小羊

紫 嵐

せいさん

鹿子木つや

38 32 28 24 18 17

第四卷 第一号 (明治45・1・1)

〔社説〕

幼者の保護

教壇

真の礼拝

想苑

安井 哲

1

海老名弾正

5

『新女界』総目次 ④1—④2

貞潔と人生	安部 磯雄	10
読書余録	小此木まつ子	14
身に沁みた親の躰（諸名家の追懷談）	海老名彈正	18
十歳で分れた母の感化	三輪田真佐子	18
人物を摸表とした教訓	桜井ちか子	25
剛腹な教育と鎖末な注意	（み）（や）	27
お金を買ふ	（み）（や）	29
太陽まで七年	（こ）（う）	29
小児の復活観	（こ）（う）	29
明治四十四年の回顧（昨年に於ける二の婦人問題）	（聖）	30
雑 俎		
聖書が唯一の読物（故小林富次郎翁の事）	靈 星 子	31
忘れられぬ二つの聖誕祭	安井 哲子	34
花の光	倉橋 惣三	38
熊ちゃんの夢	野口せい子	40
星の話	新 井 生	43
〔詩〕子供の歌園	ステープンソン〔作〕	46
家 庭	赤星生訳	46
子女教育にす対する母の務（其十八）	海老名みや〔談〕	48
二つの家庭		53
随感		
新年の感	（き）（よ）	54

一言一行
小児を尊敬せよ

新刊紹介

○『英国より祖国へ』内々崎作三郎著 北文館発行○『実用家計簿』坂部俊子案 北文館発行

子供欄

ゆり子とポチ

林町たより

〔紫 嵐〕
せいさん
〔64〕〔57〕

第四卷 第二号（明治45・2・1）

〔社 説〕

失敗の教訓

教 壇

希望の生活

想 苑

結婚及び離婚問題と基督教

女子の高等教育問題に就て

予が在独中の見聞の二三

〔詩〕永生の歌

身にしみた親のしつけ（諸名家幼時の懐旧談）

談

親の志をつげ

海老名みや	20
高田 畊安	19
村 上 幸多	16
親 倉 小羊	12
姉崎正治〔談〕	8
海老名彈正	4
安井 哲子	1

母の祈祷	山室 軍平	25
尊き母の苦心	鳩山 一郎	29
子供をしつける二の大切な事	塚本 はま	31
文苑		
信子の父様 (二)	紫 嵐	32
日記の一節	野口せい子	39
〔短歌〕松上鶴 (勅題撰歌)		41
雑組		
隠れたる閨秀画家	S T 子	42
矯風会の今昔	海老名みや	46
今路加伝	聖 山 生	48
百四十四日分の中へ		50
家庭		
何如して子女に家政を教ゆべき乎	某夫人談	51
石鯨の素人鑑定法	(安永舎主人談)	55
雑誌『ホーム』の発刊		55
編輯局の一隅にて	(聖)	56
〔社説〕		
自利と他愛	安井 哲子	1
教壇		
選ばれたる民	海老名弾正	5
想苑		

第四卷 第三号 (明治45・3・1)

聖き生活の意義と其方法	谷津 直秀	11
玩具の心理及び教育	高島平三郎(演)	15
基督教にまねた神前結婚		23
身に沁た親の躰 (諸名家幼時の懐旧談)		24
厳格なりし家風	宮川經輝(談)	24
懐かしき思出	元良よね(談)	28
雑組		
覚醒の意義を貴からしめよ	海老名みや	35
姉より妹へ	K H 子	38
友の許に	野 菊	41
〔短歌〕二月の雨	野口 精子	43
家庭		
子女教育に対する母の務 (其十九)	海老名みや	44
玩具撰択の注意	高島平三郎述	49
随感		
吾が姓名と宿所	哲 子	52
初孫を持ちし感	よ ね 子	53
天国の葉書	み ね	54
廃物利用展覧会	(せ い)	56
皆様の御手許まで		55
〔社説〕		
第四卷 第四号 (明治45・4・1)		

『新女界』総目次 ④4—④5

感謝	安井 哲	1
噫本多庸一先生		4
教壇		
我が身の刺	海老名彈正	5
想苑		
欧米児童の学校外の生活	棚橋源太郎(談)	11
欧米に於ける女子教育の現状	雀部願宣(談)	16
實際より見たる女子高等教育	重松 茂野	22
身に沁みた親の躰け(四)		25
過渡時代の教育	桜井鯉子(談)	25
愛の心深き父上	掛井 岩子	30
我が幼時	聖 山 生	32
文苑		
夢うつゝ	紫 嵐	34
雑俎		
支那に於ける家庭の事情	譚毅公(談)	37
近頃の少女雑誌(読ませて良いか悪いか)	聖 山 生	39
○『少女』 女子文壇社発行○『少女の友』 実業の日本社		
発行○『少女界』 大洋社発行○『少女画報』 東京社発行		
○『お伽俱樂部』 お伽俱樂部社発行		
家庭		
改良すべき事(一) (来客及び訪問に就て)		41
和洋折衷主義	コーツ博士夫人(談)	41

一風違った私の主義	某夫人(談)	45
随感		
女子の高等教育と家事の見習	み や	49
一滴の涙はなきか	み や	51
細かに、はつきりと	よ ね	53
謹告 本誌の発展に就て		53
卓上見聞(彙報)		54
○両女史の光栄○藍綬褒章を受く○キッター女史○二保婦の表彰○認可されたる女医学校○第四回児童博覧会編輯局より		56

第四卷 第五号 (明治45・5・1)

弱者保護の美德	安井 哲子	1
御挨拶	小橋三四子	4
教壇		
柔者の勝利	海老名彈正	5
漫遊みやげ	坪井正五郎	12
婦人と職業	浮田 和民	17
社会生活の変化と女子の職業	(綱島梁川)	17
一にして二にあらず	廣岡 浅子	21
女子の職業に就ての卑見	小橋三四子	26
社会への御相談		31
うめくさ		

わが受洗に就て	志立たき子	32
婦人は太陽の如くあれ	井深 花子	34
家庭		
自然と子供 (子女教育に対する母の務 其二十)	海老名みや子	40
野薔薇	和 子	46
土のない土地で子供のした園芸		47
新刊紹介		48
○『理想の生活 (静子の巻)』羽仁もと子著	婦人の友社	
発行		
わが母 (身に沁みた親の躰け 其三)	矢島 樗子	49
文苑		
春	紫 嵐	52
〔短歌〕榛名みち	野口せい子	58
五月雨	野 人	59
壊れた器	野 菊	60
植物日記	某高等女学校一年生	61
随感		
女子教育を掘抜き井戸の深さに	(矢島樗子)	62
之も亦一の徳・場合を見るのも大事の注意	(安井哲子)	62
縁の下の力持	(元良よね子)	63
教会は病院	(宮川経輝)	64
母たらんとする心	(陶 子)	64
世の大なる矛盾	(幽 香)	65

迷ひし歳月を惜む	(三 四子)	66
真に醒めたりや	(聖)	66
定価の改正に就て	事務係	67
時事其折々	一 記者	68
○東宮甲府御成○大西洋上の惨劇○総選挙来る○無試験入学の廃止○通俗教育調査委員会の読物認定		
編輯だより	(三 四子)	72
第四卷 第六号 (明治45・6・1)		
美しい感化の実験	安井 哲子	1
うめくさ	(三 四子)	4
教壇		
聖顔の光	海老名弾正	5
誌友金森小壽夫人を記念す		
嗚呼金森小壽夫人	聖 山 生	13
〔故金森夫人の話〕	(せ い)	15
我が姉上	市田夫人談	16
妻小壽	金森通倫談	19
九郎ちゃんのお家	海老名みや子	23
金森小壽子姉略歴	(聖 山 生)	25
〔短歌〕行く春の頃	野口せい子	27
〔俳句〕夏八句	和	28
〔詩〕かゞやき	みどり	28

少女の指導に就て	宮田 脩	29
少女と読物	三谷 民子	32
東西の少女	金子 白夢	35
謡ひつゝ働く生活	久留島武彦	38
話し方の研究	みさを	48
弘子の母様より	志立たき子	52
三越の児童博覧会	文苑	55
わが父の遺訓(身に泌みたる親の躰け 其の四)	紫 嵐	58
片割月	久野 恭子	62
夢のこと	うめくさ トルストイ翁の婦人観	63
うめくさ	廣岡 浅子	64
随感	一 記者	65
国民に豊富なる信仰を与へよ	小此木松子	66
身の光は目なり	森田松栄子	67
所謂日本調子	カアザリン、マグドナルド	68
抜萃帳	小橋 陶子	69
今日の日本の建物	一 記者	71
墨国より		
時事其折々		
○李容九の逝去○全国中学校長会議○ウエールス国教廃止案○人道歩行の励行		
新刊紹介		

○『理想の婦人及家庭』実業の日本社発行
編輯だより

第四卷 第七号 (明治45・7・1)

青年の希望と失望	安井 哲子	1
うめくさ	(三 四子)	4
教壇	海老名 彈正	5
恩寵の豊	姉崎 正治	12
夏の祭	日高 沈聲	18
〔短歌〕枕頭の暗	記 者	19
其の後の金森家	久留島武彦	23
話し方の研究(其の二)	野口 精子	29
彩虹庵を訪ふ	記 者	34
下婢の為めの講演会	記 者	35
外国婦人討論会	S T 子	39
耳学問の卒業者	島崎 藤村	41
〔オスカワイルド曰く……〕		
自然と子供 其の二 動物に就て(子女教育に対する母の務 其の廿一)	海老名みや子	42
余裕ある生活には規律が必要	某夫人談	48
夏季の哺乳児の栄養	山下 清	51
ローヘンゲリン	三枝幾子訳	54
随感		

(編 者) 72

近頃のわが大発明

廢時利用

復活

心なほ弱きは如何

時事其折々

○エリオット博士の来朝

編輯だより

第四卷 第八号 (大正元・8・1)

聖上陛下崩御

社説

休暇の利用

うめくさ

教壇

神との交り

〔詩〕湖畔雜吟

世界の舞台より見る日本人

夏の祭 (前承)

〔詩〕ほうづき、炎天、紫蘇

エリオット博士と語る

森の家より

真夏の編輯室

野口幽香子 66

海老名みや子 67

笠間しのお子 68

小橋三四子 69

一記者 70

(三四子) 72

うめくさ

夏の朝

〔短歌〕茄子籠

キャンプの夏

夏と児童遊戯の二三

自然と子供 其の三 動物に就て (子女教育に對する母の務 其の廿二)

簡易生活と食物

新刊紹介

○『改訂 育兒法』加藤照麿述 婦人の友社発行

晩年の手習

新刊紹介

○『孤島の姉妹』三津木春影著 実業之日本社発行

ローヘングリン (中)

うめくさ ミレー・レーニー

随感

暑さも亦心の持ち様

変化の生活

蝶の訓

時事其折々

○聖上陛下御重態

編輯だより

しのお子 31

里の子 33

小此木松子 34

甲賀 藤子 35

海老名みや子 39

手塚かね子 45

小林あや子 50

三枝幾子訳 (樽 牛) 52

安井 哲子 53

高田 畊安 54

姉崎 正治 55

和 子 65

廣岡 浅子 66

たみ 子 69

某新聞婦人記者 70

茅野 雅子 72

高田 畊安 72

姉崎 正治 72

和 子 72

廣岡 浅子 72

たみ 子 72

第四卷 第九号 (大正元・9・1)

今上天皇陛下踐祚	
新帝御勅語	
御製	
先帝陛下御生涯	記 者 5
御歌	10
皇太后陛下下の御坤徳	
吾等の覚悟	記 者 11
先帝陛下に関する横井小楠氏の書翰	安井 哲子 15
耶蘇故山を偲ぶ	海老名彈正 18
パンヤンの一生	24
改元所感	19
明治より大正に入る婦人界	鳩山 春子 25
矯風事業の今昔	小崎千代子 28
来らんとする社会に望む	廣岡 浅子 30
諒闇中の朝鮮	廣瀬 咲子 33
ブース大將逝く	記 者 34
維新前後	杉 亨二 35
〔短歌〕個々の音	野口 精子 40
水の花と小島	久野 恭子 41
米国婦人	原口竹次郎 42
趣味の生活	海老名みや子 50
倫敦の裸婦と幼児の戯け	太田 秀子 56

ローヘングリン (下)

随感

天真なれ

受洗後の修養

明治より大正に移りし日

時事其折々

○諒闇日誌

○新刊紹介

○『恩寵溢るゝの記』パンヤン作 松本雲舟訳 警醒社発

行

編輯だより

第四卷 第十号 (大正元・10・1)

〔短歌〕利根の秋	野口せい子 1
社説	
嵩高なる乃木大將の人格を追慕す	安井 哲子 2
教壇	
靈活の信	海老名彈正 5
御大葬奉送記	
〔短歌〕諒闇の秋と云ふことを	辻村 靖子 10
わが自覚の時	近藤ふち子 14
(→) 凡そ三階段を経たり	矢島 樞子 15

三枝幾子訳 60

海老名みや子 66

岡崎 小文 67

笠間しのぶ子 68

70

71

三四子 72

〔詩〕明治天皇大葬奉送の歌

(一) 青年時代の追懐

(二) 身の棘は愛の鞭

(四) 全く我れに克ちし時

人生と宗教

精神界の新紀元

外人の誤解とは何ぞ

山上の垂訓を読む

聖書に感ず

遠藤千浪さん

児童の体質と品性

衣服の趣味(趣味の生活 其の二)

新刊紹介

○『赤坊を泣かせずに育てる秘訣』羽仁もと子著 婦人之

友社発行

安価の滋養品

文苑

幻覚

随感

九月十八日の日記

近きにもとめむ

寄宿舎の日曜の夕

時事其折々

○明治天皇御大葬

編者より

第四卷 第十一号(大正元・11・1)

不幸なる婦人

恩寵の力

人生の四惑

〔短歌〕泥人形

学校より家庭に

児童観察の必要

御相談数件

高等女学校より

日本画各流派のお話

朝鮮の女学生

婦人の姿勢美と体育

面白い女学校

祖母様

トルストイの私信

新刊紹介

○『家計簿』羽仁もと子編 婦人の友社発行○『女中訓』

羽仁もと子著 婦人の友社発行

濁った血

おもかげ

「遠藤千浪さん」を読み

随感

敵を愛するの心

安井 哲子

海老名 弾正

海老名 弾正(演抄)

野口 せい子

佐々木 吉三郎

安井 哲子

麻生 正蔵

沢村 専太郎(談)

渡瀬 常吉

木内 愛子

しげ 子

大塚 楠男

森田 松栄子 訳

紫 嵐

久野 恭子

井上 伊之助

原 の 人

あさましき心
天国の面影
勢力
女学生の風規につき
時事其折々
○近東の風雲
編者より

第四卷 第十二号 (大正元・12・1)

公平と同情	安井 哲子	1
教壇		
道德上の奴隸	海老名彈正	5
ルナン氏耶蘇伝より		
朝鮮の女子教育と外国婦人	西森いは子	11
児童の宗教教育に就て	宮川壽美子	12
小なれど大	大塚 楠男	14
ビール国の称ある独逸と其の禁酒事業	村上 幸多	20
今回創設の通俗教育館	記 者	25
油絵の話	久米桂一郎	29
美趣と人格	金子 白夢	34
読書の趣味 (趣味の生活「其の三」)	海老名みや子	41
新刊紹介		45

八重子	66
記 者	67
記 者	68
(三四子)	69
	72

○『夏の学校』成蹊実務学校生徒作 中村枯林跋 成蹊実務学校発行	
○『主婦日記』羽仁もと子編 婦人の友社発行	
旅順まで	中安 親子
十字架の夢	松本 雲舟
新刊紹介	
○『美しきジョー』日高善一訳 東京内外出版協会発行	
ブース大将夫人がその子に贈りたる書	
翰の一節	61
随感	
趣味ある贈物	みや子
「絶えざる」といふ事	宇佐美敬子
母の心	金矢 藤子
故国雑感	みさを
乳と母親	柳 八重子
女子と個性発達	記 者
時事其折々	記 者
○劃一教育問題○米大統領の当選○メービー博士の来朝	小橋三四子
社友となる辞	72

第五卷 第一号 (大正2・1・1)

〔社説〕	
諒闇中の新年を迎ふ	〔安井哲子〕
教壇	1

クリスチャンの光栄

海老名弾正

5

寸分も隙のない人

安藤 太郎

10

メエテルリンクの婦人観

金子 白夢

11

少女期の教育に就て

倉橋 惣三

18

境遇と遺伝の勢力(人種改良学に就て)

福井晋太郎

22

学校教育の弊害

エリザベス、チャイルド
野村徹 訳

29

家庭に於ける男子の跳梁

阿部 清蔵

34

信仰の勝利

鹿子木艶子

37

仏蘭西の聖誕祭

谷津 直秀

40

聖誕祭
対話旅(本郷教会日曜学校聖誕祭用)山岡 信夫
岡上 守道

44

サンタクロースの工場訪問記

坂本花子 訳

53

新刊紹介

○『印度大聖サルマ物語』酒井鋒済訳 サルマ物語発行

56

所発行

交際の趣味(趣味の生活 其四)

海老名みや子

57

時の問題

記 者

65

○巴爾幹戦争の其後

〔新刊紹介〕

66

○『復活の武士(前編)』松本雲舟 植竹書院発行

随感

日曜学校私議

(記 者)

67

婦人の地位の向上と家庭の将来

(記 者)

69

趣味ある手紙

海老名みや子

70

〔詩〕貝

テニソン卿

71

編輯局より

(大塚楠男)

72

第五卷 第二号 (大正2・2・1)

〔社説〕

青年の心を了解せよ

安井 哲

1

教壇

復生の必要

海老名弾正

5

神と僧なる生活

山室 軍平

10

浄心録(承前)

谷津 直秀

15

狙ひすました祈禱

金森通倫(演)

16

半生の事業

矢島 楯子

19

女子高等教育反対とは何ぞ

愛 薺 薇 生

23

人事相談部から見た男女青年

山本邦之助

25

新刊紹介

○『日々の祈』松本雲舟 警醒社発行 ○『子供の歌園』

28

ステーション原 著 福音社書店発行

赤 星 仙 太 訳

29

運命の人

田島しげ子 訳

40

若き母の日記

大平みさを

45

日本で始めての「星のお祭」

石川 武美

45

靈の趣味の涵養（趣味の生活 其五）
元良博士の事ども
教会無駄話

新刊紹介

○『魔が沼』渡辺千冬訳 警醒社発行
随感

女子の前に用ふる言葉

お夕飯の卓上話

家庭生活に於ける婦人の実情

前号の日曜学校私議に就いて

両親の虚栄

団体の勢力

時の問題

婦人選挙権問題

ロダン翁作品展覧会

編輯局より

第五卷 第三号（大正2・3・1）

広い仕事と深い仕事

基督教に據れる救拯

希望の生活と失望の生活

物足らぬ女学校教育

親の設けし大学

海老名みや子

相原生

聖山生

安井哲子

海老名みや子

記者

記者

鈴木衡平

記者

記者

記者

記者

記者

記者

記者

記者

記者

記者

記者

記者

記者

記者

記者

記者

48

54

57

61

62

63

64

65

67

69

69

71

72

72

72

72

72

72

72

72

72

72

72

72

二人の臨終

貧富に処する覚悟

日々の心得

幼時に感じたる神秘

時事其折々（第二）

○小学教師の肺病

「桐の花」を読む

初めて教会に参りてより

時事其の折々（第二）

○マデロー銃殺

南窓静話

時事其折々

○マデロの銃殺（其二）

親子夫婦間の靈の交感（靈的趣味の涵養 第二）

たどり来し路

寄生蟹の話（附り無人島物語）

ストーブの前

随感

新しい女

積極的な道徳

元良未亡人の御心を思ひやりて

聖人の御代のようなお話

此頃目につく事

綱島 佳吉

某夫人

棟居喜久馬

日向 きむ

野口 せい

堀内ます子

小橋三四子

海老名みや子

くれかし女史

はにわ

聖山生

額賀鹿之助

海老名一雄

小林 あや

海老名みや子

海老名みや子

海老名みや子

海老名みや子

海老名みや子

海老名みや子

海老名みや子

海老名みや子

海老名みや子

19

23

26

27

29

30

34

38

42

43

50

53

60

66

67

68

70

71

71

71

71

71

71

編輯局より

第五卷 第四号 (大正2・4・1)

孝の一字

卒業と入学

奉仕の徳

常に用意せよ

現今の日曜学校問題

〔詩〕愛の化身・聖恩

身に相應しい装ひ

平瀬貝類博物館

上野より

〔詩〕鄙の春

巢鴨より故郷の姉上に

H様へ

新らしき女を論ず

(一) 新なる者に生命あり

(二) 真新婦人

(三) 新しき女の危機

時事其折々

○近頃の蒙古問題○米国大統領の就任

随感

72

(海老名彈正)

安井 哲子

海老名彈正

山室 軍平

田村 直臣

高田 研安

海老名みや子

加藤 延年

野口せい子

日向 きむ

堀内ます子

わくらは

向 軍治

宮崎 光子

大塚 楠男

60

57

54

49

49

45

42

40

38

31

22

21

17

12

6

2

1

同窓会今昔

福ひなる務

小林姉の御手紙から得た奨励

活動写真「サタン」をみて

美の伝染

編輯だより

第五卷 第五号 (大正2・5・1)

〔若し基督教信者が神そのものの心に……〕

現代母親の覚悟

包括的人生観

女子教育の理想

〔短歌〕潮ざえ

米国婦人の特質

愛神愛人の理想

箴言に現れたる男女訓

結婚論(其一)

大統領ウィルソン氏の家庭

沙千狩の話

おもひのあと

〔詩〕涙の二等分(貧民窟の詩)

風聲鶴涙

海老名みや

小林あや子

元良 よね

森脇 白夜

一 記者

72

70

68

67

65

64

(海老名彈正)

安井 哲子

海老名彈正

ピーボデー博士(演)

伊藤 悌二

原口竹次郎

谷津直秀(演)

三井 北川

海老名みや子

海老名一雄

加藤 延年

日向 きむ

賀川 豊彦

大塚 楠男

57

53

51

48

45

38

34

28

19

18

14

6

2

1

1

2

6

14

18

19

28

34

38

45

48

51

53

第五卷 第七号 (大正2・7・1)

元気の貯蓄

見るべからざる神の姿

〔短歌〕ノートより

ホゼアの悲嘆

恩寵に満てる農村生活

結婚論 (其三)

日本最初の女医 (荻野吟子刀自の事)

〔短歌〕若葉の島より

四人の日記

一、千駄ヶ谷より

二、恥しい買物

三、八幡の森蔭

四、旅寝の二日

独逸国婦人の労働生活者

植物のお化

欧米人士の高尚なる道楽

おたより

○信頼せる姉上に さだ子○真の安心 南湖の人

〔新刊紹介〕

○『小説あかつき』黒瀬二水著 興楽社発行

時事其折々

○土耳其遂に滅亡か○独帝即位廿五年祭

安井 哲子

海老名彈正

久保 竹二

三井 北川

西内 天行

海老名みや子

海老名彈正

伊藤 悌二

元良よね子

海老名みや子

堀内ます子

野口せい子

アンナ、プリトー夫人

谷津 直秀

宮島幹之助

宮島幹之助

63 62 60 56 53 48 43 41 36 33 32 28 23 15 12 11 6 2

〔新刊紹介〕

『胎教』下田次郎著 実業之日本社発行

随感

天然に親むが避暑の目的

小学生の溺死に就いて

規則から離れて然かも之と調和せよ

託児場の開設

清水を満せる桶

編輯局より

海老名みや子

聖 山 生

海老名一雄

大塚 楠男

大塚 楠男

大塚 楠男

第五卷 第八号 (大正2・8・1)

〔詩〕明治大帝

驚くべき信仰の力

神の家族

子供より受けたる教訓

一、今は亡き兄より

二、いざや進まむ高峰まで

三、三年三月の生涯

四、絶対的服従

五、尊い同情心の萌芽

六、家庭に於ける最良の牧師

七、天国のもの

故有栖川宮御詠草

高田 畝安

安井 哲子

海老名彈正

藤田寛太郎

堀内ます子

野口 幽香

宇佐美けい子

塚本 はま

額賀鹿之助

海老名みや

39 37 32 29 28 26 19 13 6 2 1 72 71 69 68 67 66 65

『新女界』総目次 ⑤8—⑤10

郷人の別れ	レオ、トルストイ〔原作〕	40
母となる記	藤井夏人〔訳〕	
結婚論（其四）	・ 紫 蘭	46
鮮満より支那へ	海老名みや子	50
おたより	小松 武治	56
○北海道より 海老名彈正〇日記より	田中生〇坑夫生活	62
の実情 堀内ます子〇嗚呼一昔	宇佐とき子	
随感		
鎌倉の一朝	三井 北川	69
編輯局より		72
第五卷 第九号（大正2・9・1）		
夏去り秋来る	（蘆 花）	[1]
娘に対する父親の責任	安井 哲子	2
天来の慰藉	海老名彈正	7
日本人の嫌な避暑振り	某英国人の談話	13
英国のフェミニズム（其二）	油谷治郎七	14
塵のうちより（感想）	内藤 濯	21
子供の知識	藤井 夏人	25
時事其折々		30
○巴爾幹戦争落着		

我教会の活ける教訓	一安八重壽	31
おもかげ	紫 嵐	37
〔短歌〕 輕井沢にて	野口 精子	44
伊香保より	海老名みや子	46
〔時事其折々〕		53
○巴爾幹戦争の落着（其二）		
夏の山家	栗原 香陽	54
〔時事其折々〕		59
○巴爾幹戦争の落着（其三）		
蔵相ロイド・デヨールデ	木 尊 子	60
如是我觀		
信仰の静と動と	てる 子	64
此道を行かば	宇佐とき子	67
随感		
活動を厭ふ浴客	海老名彈正	69
人生の二面	藤田 逸男	70
編輯だより		72
第五卷 第十号（大正2・10・1）		
苦勞と修養	安井 哲子	2
苦痛の意義	海老名彈正	7
青年の教育	（高島平三郎）	11

英国のフェミニズム(其二)	油谷治郎七	12
在米我邦婦人の状態	山本邦之助(談)	19
申命記に現はれし愛の神	三井 北川	23
英国ロイド・デヨールヂ(其二)	木 尊 子	26
蔵相	藤田寛太郎	30
墓地に対する意見	海老名みや子	33
結婚論(其五)	野口 せい	40
〔短歌〕玉のゆめ	高田 慎吾	41
不良女子の教育法(紐育州女子感化院)	賀川 豊彦	49
「なまけもの」の科学的研究	一安八重壽	55
我教会の活ける教訓(続)	宇佐 とき	60
痛ましい羽織	トルストイ(原作)	65
子供の知識(対話)	藤井夏人(訳)	72
編輯だより		

第五卷 第十一号 (大正2・11・1)

人真似と吹聴	安井 哲子	2
快活なる道德生活	海老名彈正	7
英国のフェミニズム(其三)	油谷治郎七	14
家庭の婦人	金森通倫(演)	22
ハバコクの愛国心	三井 北川	25
女性の神秘	金子 卯吉	28

第五卷 第十二卷 (大正2・12・1)

胤造のファンタジー(小説)	石田 樫村	30
結婚論(其六)	海老名みや子	33
少年事業としての日曜学校	相原 一郎介	39
「茶を作る家」を見て	薔薇楼主人	45
おもかげ(下)	紫 嵐	50
子供の知識(対話)	トルストイ(原作)	59
随 感	藤井夏人(訳)	67
気の毒な日本の子供	海老名みや子	68
後悔	元良 よね	70
おたより		
○都より田舎の妹へ	山内生○押花を送るとて	72
子	堀内ます	
編輯局より		

〔人生の花は腿せ……〕

(梁 川)

〔1〕

犠牲の苦	安井 哲子	2
女子の友	海老名彈正	7
〔短歌〕紅葉・鹿	一安八重壽	12
ナホムの敵愾心	三井 北川	13
新年を迎ふる用意	海老名みや子	17
悩みの後	宇佐とき子	22

友に	紫 嵐	25
〔短歌〕秋のたびの歌	安田 尚義	29
小林道子さんの小さい足跡	なにがし	30
〔短歌〕歌の宮殿	野口せい子	33
生の秘密	栗原 香陽	34
一人となりし後	夏 人	40
信仰笑話	(S)	47
魔の木	小野小峽訳	48
遺伝の力(一)		52
〔広告〕クリスマスの贈物は……		53
随感	み や 子	54
しほらしい行為	藤田 逸男	55
船の中にて	山岡 信夫	57
加藤迂一君	り き 子	59
クオーヴザスを見て	一 記 者	61
生活難	金 森 通倫	63
世界より貴きもの		65
遺伝の力(二) (山室重平「模倣の力」)		66
おたより		66
○絵葉書だより 海老名弾正○大鰐温泉より	堀内ます子	72
○感謝 一安八重壽○クリスチャンの女として	NS子	72
編輯局より		

第六卷 第一号 (大正3・1・1)

〔口絵〕清教徒のクリスマス		
〔詩〕清教徒の聖誕祭の歌 (口絵参照)		
アミ、ハスラム、ドウニ(作)		
降誕祭所感	佐藤 清訳	2
聖子の誕生	安井 哲子	4
生命の麴麴	海老名弾正	9
〔短歌〕ぎんのほし	新渡戸稲造	14
伯林の聖夜	野口 糟子	15
古いサロメ	有田四郎画	16
實用ノートブック	油谷治郎七	19
私の最初のクリスマス	吉野 作造	21
想へばなつかし		22
三十餘年の昔	海老名みや子	22
女学生の欠陥	元良 よね	25
七切れを八切れに	榎山 栄次	28
〔詩〕聖誕祭の歌	三谷 民子	29
昔がたり	コルリッヂ作	31
お伽十人の童女 (馬太傳廿五章より)	山内 生訳	32
聖誕祭の事ども	しげ子訳	38
	岡上 守道	45
	やすを生	45

〔1〕

〔短歌〕さみしきおもひ	久保 竹二	48
幼稚園より	それがし	49
招待状を待ちつゝ	日向きむ子	52
聖誕の日	キングズレー作 山内 生訳	53
曙姫	小野 小峽	55
海上のクリスマス	花代 訳	60
いとし子	安井 環	64
降誕祭を祝う	斎藤 露月	65
お雑煮は		66
随感		
ゆったりした気分	みや子	67
一寸した疑ひ	一 記者	71
編輯局より		

第六卷 第二号 (大正3・2・1)

〔詩〕父とともに	高田 晁安	〔1〕
強さと優しさ	安井 哲子	2
永生の言葉	海老名 彈正	7
恋愛のうた (雅歌)	三井 北川	12
忠臣蔵の道徳 (其一)	海老名 彈正	18
救世軍の餅配を手傳ひに行く記	小橋三四子	25
結婚論 (其七)	海老名 みや子	29

新刊紹介

○『天路歷程』パンヤン作 松本雲舟訳 警醒社発行

蜜柑の話 加藤 延年

医局鎖談 (一) 松村彌祐談

小児の涙 (其一) ウィルデンブルク原作
岡上玉恵訳

医局鎖談 (二) 松村彌祐談

思ひ出 (生の秘密 その二)

医局鎖談 (三) 香 陽 生

春 (創作) 松村彌祐談

奮斗は美観なり 鵜沼 直

随感 一安八重壽

日誌の二つ三つ 彈 正

多忙に處する道 みや子

師の恩 ます子

受洗の悦び ます子

公德 一安八重壽

編輯だより 72

第六卷 第三号 (大正3・3・1)

〔詩〕父の愛によりて生きん	安井 哲子	〔1〕
精神的な生活と物質的な生活	海老名 彈正	6
王の宴會		

桜の花の話

時事其折々

○此度の議会に於ける問題○工場法案○外米輸入税廃止案

随感

時は金なり

弱い意志

可愛い淑子

南朝の桜

編輯だより

加藤 延年 51

吉野 作造 61

元良 よね 67

元良 よね 68

みや子 69

加藤 延年 71

72

〔短歌〕罪人の歌

〔詩〕満足のかなしみ

『闇に輝く光』を読みて

新刊紹介

○『婦人解放の悲劇』伊藤野枝訳 東雲堂発行

子供の涙(其四) ウイルデンブルーク著 玉恵 訳 40

夫婦の逆境に處するの道

衣服取扱に就て

"Out of"

新刊紹介

○『エリザベス、フライ』森田松栄子訳 警醒社発売

予が見たる石井十次先生

ルクリシヤ・マット(二)

〔短歌〕春雨の日に

茶臼原の印象(其二)

時事其折々

○我国近時の政変○アメリカとコロンビアとの和陸

随感

博覧会見物に就て

求めたるものを得たる喜び

皇太后陛下の御仁愛

編輯だより

笹岡 安正 26

野口 せい 28

岡崎 小文 30

39

玉恵 訳 40

海老名みや子 47

竹本 菊代 51

52

55

西内 天行 56

阪本花代訳 61

一安八重壽 66

松本 圭一 67

〔吉野作造〕 74

みや子 77

りき子 78

79

80

第六卷 第五号 (大正3・5・1)

皇太后陛下御眞影

皇太后陛下十二徳御歌

奉悼

皇太后陛下の御一生

御坤徳の数々

〔短歌〕二首

吾等奮起の時期

神の国の所在

〔短歌〕偶感

家庭に於ける科学と信仰の調和

旧道徳の批判

巻頭

與謝野晶子 9

安井 哲 10

海老名彈正 15

伊能 香陽 18

渡瀬 常吉 19

海老名彈正 23

第六卷 第六号 (大正3・6・1)

〔祈祷は人の靈魂を……〕

女子の寄宿舎生活

神の面影

新刊紹介

○『今昔物語』川添桜齋訳 ローマ字ひろめ会発行○『少年小女リッコン物語』宮地竹峰訳 内外出版協会発行

私の受けた教育と私の理想

緑陰談片

独逸の博物館

私の感心した両夫人 (石井服部両夫人の内助の功)

星島 二郎

夫婦の逆境に處するの道

子供の涙 (其五)

タリスメンを讀みて

最少し不斷着に注意せよ

此頃の果物と其調理法

時事其折々

○島国根性の打破

おたより

○晩香は遂に死にました

桜内篤彌○満洲の自然と人事

山岡信夫

(小山鼎浦)

安井 哲子

海老名 正

安井 哲子

内ヶ崎 三郎

Y S 生

星島 二郎

海老名 みや子

玉恵 訳

三谷 民子

海老名 美や子

手塚 かね子

吉野 作造

ウイルデンブルグ著

61

55

53

50

48

40

36

31

隨感

収賄問題より受ける教訓

くさひき

みどりのかげ

一寸した不注意から

驚くべき慈善の一例

編輯だより

第六卷 第七号 (大正3・7・1)

自然の教訓

基督の人生觀

私の好きな事

母親の感化

効果を収めし女子教育

基督教女子教育家に望む

薔薇と女性

新刊紹介

○『心の洗濯法』三井芳太郎著 警醒社發行

子供の抱き方と子守の取扱方

〔詩〕人よ罪の人よ

夫婦の逆境に處するの道 (其三)

様々なる生活の一日

一、新聞社の編輯局より

海老名 みや子

元良 よね

(K夫人)〔等〕

りき子

K 生

〔安井哲子〕

海老名 正

関 みさを

嶋田 三郎

齋藤 紫水

内ヶ崎 三郎

栗原 基

岸辺 福雄

松本 芳江

海老名 みや子

さゝがに

65

67

69

70

71

72

2

6

11

12

15

二、郊外の主婦生活

三、寄宿舎の一日

四、魚河岸より

〔五〕幼稚園の一日

〔六〕託児所の一日

〔七〕三日は主婦三日は教師

英国皇帝より褒賞されし婦人慈善家（バー

デットカウツ男爵夫人の事）

なみだの記

夏の清涼飲料について

時事其折々

○愛蘭問題

新刊紹介

○『家庭和洋料理辞典』東京割烹研究会編 警醒社発行○『実

食物改良論 附料理法』小室眞咲著 成美堂発行

随感

宝の箱

海外へ送る手紙

寄宿舎より母親に

編輯局より

第六巻 第八号（大正3・8・1）

〔写真〕米国に於ける託児場食事の時

他人の名を濫用する弊

創造の精神

慈善会に対する義務

屋間託児所に就て

〔短歌〕右往左往

福島高等女学校の二坪農園

模造の好きな独逸国民

楽しかりし米国の夏

避暑に行く人に

故郷の旅

〔詩〕自由

夫婦の逆境に處するの道（其四）

〔書簡〕海老名みち子様へ

家庭生活の経験

心の泉を汲みてもてなせ

仙境の石屋

時事其折々

○奥地利皇儲殿下の暗殺

寄宿舎の一隅より

〔1〕

随感

子供の言葉が悪くなった実例

豆売さん

編輯だより

みや子
さぶね

70 71 72

第六卷 第九号 (大正3・9・1)

〔短歌〕青芝の露

時局と地方婦人の生活

文明の詛

閑却されたる女子修養の半面

英国に於ける野薔薇の日

生れ更った生活

停車場内の迷羊

富士山上の日の出

米大統領ウエルソン夫人の死

ベアトリス尼

非凡な良人に連れ添ふ妻の苦心 (夫婦の

逆境に処するの道 其五)

卵の善悪を見分くる法

卵を保存する方法

信州追分より

野口せい子

安井 哲

海老名弾正

村田 勤

宇佐とき子

一 記者

額賀鹿之助

20 16 15 11 6 2 (1)

34 25 20 16 15 11 6 2 (1)

35 34 25 20 16 15 11 6 2 (1)

43 47 47 48

海老名みや子

海老名みや子

海老名みや子

海老名みや子

兄の死

たのしきまゐる

那須野の蔬菜料理

新刊紹介

○『鉄道旅行案内』鉄道院著 博文館発売

靴下の繕ひ方

おたより

○田舎より 吉田きく子○田園生活 芹沢とし

随感

自分に娘があつたなら

心の洗濯

隠れた女の働き

編輯たより

第六卷 第十号 (大正3・10・1)

〔短歌〕秋

基督教の救済

歐洲の戦乱より受くる教訓

独逸の根本主義に学べ

最大打撃を受くるは婦人

善く聖訓を奉ずる者勝たん

目を醒して起て

加藤きみ子

佐保 姫

手塚かね子

54 59 62 63

宮川すみ子

64 66

弘田由己子

ます子

ます子

ます子

(編者)

72 70 69 68

野口せい子

海老名弾正

2 (1)

村川 堅固

内ヶ崎作三郎

高田 研安

矢島 樗子

14 13 11 8 8 2 (1)

歐洲の手本となれ 神の前に誠心誠意 すゞ子さんとみいちゃん 靈戦の志気を見つけよ 近代犠牲の実例（大政を奉還せる慶喜公の心事） 時局と女子教育 家庭さまぐ（其一）軍国の家庭 宮津沖にて 緑の窓の下にて 菌類の良否鑑別 夏期学校の記 軍国婦人の面影 時間と燃料との経済な御飯の炊方 時事其折々 ○歐洲戦争の経路 長嶺源子女史 季節の料理 梅干の効能 大根おろしの効能 随感 戦争とお祖母さん 職員室から ジャムの製法	小崎千代子 廣岡 浅子 三井 北川 安藤 太郎 松浦 政泰 海老名みや子 三谷 民子 日向きむ子 古市 稲村 井伊 松蔵 吉野 作造 七戸 綏人 菊 子 案 山 子	17 18 19 20 24 29 31 37 40 42 43 52 56 60 63 65 65 67 71
---	---	--

編輯だより

第六卷 第十一号（大正3・11・1）

御製・御歌 将来に対する吾々の努力 患難の友 創痕 マダムキユーリー 家庭と新聞 身の上相談から見た社会 出征軍人に美人絵葉書を贈る事に就て ベアトリス尼（其二） 〔短歌〕山に歌へる 十三の頃 〔新刊紹介〕 ○『日曜学校（第一号）』日本日曜学校協会編 教文館発売 ○『少年俱樂部（新刊号）』大日本雄辯会発行 家庭さまぐ（其二）女子の貞操 独逸の国民性 各国傷病兵の救助 随感 国民の潜勢力	安井 哲 海老名彈正 三宅 正彦 有 川 生 海老名一雄 小橋三四子 矢島樺子談 メーテレンク作 盤 壑 生訳 一安八重壽 伊藤 恵子 海老名みや子 吉野 作造 海老名みや子 案 山 子	2 6 12 17 22 27 31 32 40 42 50 51 57 64 65 72
--	---	--

天然の賜
惨ましき戦争
出征者家族の心
憤慨にあまりある事件
戦時に於ける婦人の活動
編輯だより

みや子 65
元良 よね 67
安井 哲 68
藤田 逸男 69

72 71

第六卷 第十二号 (大正3・12・1)

〔短歌〕初霜の朝
生活の深淺
建徳の靈
ローマ法王の更替
女子の貞操 (家庭さまぐ 其三)

野口せい子 (1)
安井 哲子 2

海老名 彈正
吉野 作造
海老名 みや子
松本 芳江
みよし
一安八重壽
メーテレンク作
松枝盤 懇訳

海老名 みや子 20

〔短歌〕朝の聖堂

松本 芳江 25

天国の婆さん

みよし 26

〔短歌〕時雨のゝ夕

一安八重壽 29

ベアトリス尼 (其三)

メーテレンク作 30

小山東助氏夫人菊野女史を悼む (小山夫人肖像)

43

〔書簡〕今暫らく迷ひませう (海老名お奥様〔宛〕)

松井とも子 44

心霊の人

内々崎作三郎 45

〔絵画〕路傍の樅

〔書簡〕南湖院より (松井家宛)

天国の欄干にて

〔短歌〕七年の夢 (小山夫人を悼みて)

病院生活より

菊野の日記帖より

〔短歌〕朝やけの窓

逝ける菊野女史の生涯

小山夫人筆 48

深井 清子 49

兵働 竹醉 50

野口せい子 52

長谷川英太郎 53

小山 東助 61

故 小山 菊野 72

松本 雲舟 74

編輯だより
社告

80

第七卷 第一号 (大正4・1・1)

新しき母

安井 哲 2

新しき母の覚悟

海老名 彈正 6

世界戦争と婦人の地位

麻生 正蔵 13

挙国一致の美談

吉野 作造 21

〔短歌〕弱き心

長谷川清子 27

聖誕祭を迎ふるに際して

思ふ事五ツ

山室 軍平 28

曙光

野口せい子 30

気輕に訪問が出来るやう

村田 勤 32

聖誕祭前の子供

羽中田為野 34

米国の聖誕祭で感じた事	36	水戸部茂野	〔詩〕愛	松本 芳江	18
交戦国の聖誕祭を懐ひて	38	安井 哲	母と読書	三谷 民子	19
平和の君	39	額賀鹿之助	友の爲めの祈り	阪本 花代	21
お父様のサンタクロース	41	額賀千代子	家庭の義務	〔ジョセフ・マジニイ原著〕 阿曾沼生〔抄〕訳	22
愛の鐘の音	43	鹿子木練子	御飯の蒸し方・頭の毛を洗う注意	内藤 鳴雪	27
布教の一法	44	高田 畊安	俳偕と女性	30	
思ひつきく（其一）みいちゃんの生ひ	47	海老名みや子	火傷の手当	海老名みや子	31
立ちの記	53	布施 公平	家庭さまざま	松本 芳江	35
〔戯曲〕たび（二幕）	57	持地 ゑい	〔詩〕求、尋、叩	志立たき子	36
日曜の礼拝中の自分	58	堀内ます子	子女教育に対する私の実験	岡田医学博士談	41
慈善団巡訪記（一）	61		感冒に油断すな	堀内ます子	42
東京市特殊小学校後援会	61		慈善団巡訪記	ある一日の記	47
玉姫小学校	63	井深夫人談	雪と霜	加藤 延年	51
味のよい豆の煮方	64	阪本 花代	茶臼原より	松本 圭一	57
特に選ばれし聖誕祭	72	志立たき子	随感		
英国より帰って	80		同情の聲	海老名みや子	65
編輯だより			主の喜び給ふ人となれ	伊藤一隆〔演〕	65
			髪を結ひつゝ	小橋三四子	67
			初めて父となりし日に	栗原 香陽	68
			尊くも亦深き親の愛	上村 邦良	69
			家庭の楽しみ	戸川 残花	71
			編輯だより	（楠 男生）	72
〔基督の十字架の死は……〕					
根抵深き生活		三井芳太郎			
基督の帰一力		安井 哲子			
欧洲戦乱と基督教		海老名彈正			
		海老名彈正			

第七卷 第二号（大正4・2・1）

第七卷 第三号 (大正4・3・1)

第七卷 第四号 (大正4・4・1)

『新女界』総目次 ⑦3—⑦4

〔短歌〕二月の春	野口 精子	(1)
なつかしき追想	安井 哲子	2
基督教の中心点	海老名 彈正	5
倫理の理想	シエラー、マシウス博士〔演〕	11
今月行はるゝ総選挙に就いて	吉野 作造	17
蘇国の遊	佐 竹 生	22
新旧思想の調和	宮田多賀子	26
学齡児童を持てる親々へ	中村 春二	29
小学教育に就いて	西山 叔治	36
小児は如何にして育つべきか	志立たき子	41
家庭の領土を広めよ (家庭さまゝ) 〔編輯〕	海老名みや子	47
畳の洗濯法	海老名みや子	50
思ひつきゝ (其二)	海老名みや子	51
有害な白酒と無害の甘酒	久布白落実	55
少年裁判	一安八重壽	56
虫ばみし古き聖書の思出	平野 信子	67
洋傘の汚点を抜くには・甘酒の搾へ方	市橋 俊夫	68
〔詩〕夕栄えの色	手塚かね子	69
お雛様の御馳走		70
編輯だより		72
〔詩〕悔ひの日	野口せい子	1
自分勝手な要求	安井 哲子	2
霊の人基督	海老名 彈正	5
〔詩〕鏡	一安八重壽	10
新らしき母の意見		11
私は社会の制裁を作る為に『すべからず』	井深 花子	12
主義を叫びたい	志立たき子	17
日本の社会及び家庭の子女智育に対する誤解		
真に子供を了解して教育し得る人はたゞ母親のみ	羽仁もと子	20
餘りに些細な事に拘泥して根本を忘るゝ勿れ	海老名みや子	24
何時迄も若い心持ちで子供の友達となりたい	宮田千賀子	29
満二才の幼児活動と其の教育上価値	河野 清丸	32
板倉勝重の教訓	芳賀 矢一	36
慈善団訪問記 (其三) 同情園の記	堀内ます子	39
畳の汚点・白衾の洗ひ方		44
妻	ラン、マクラレン作	45
	阪東美津恵訳	

愛子

〔短歌〕六首

これからの小児の病氣

時事其折々

○日支交渉

メリーは教会に行かないから

編輯たより

第七卷 第五号 (大正4・5・1)

〔短歌〕五首

閑居の危険

悲観か樂觀か

信仰と慰安

女学校を卒へて家庭に止まる娘の教育

都会の女学校を卒へて帰る人に

洗濯物や襦袢を取入る時・アンモニア

水を用意しなさい

私は何故に娘を英国で教育するか

高等教育を受けしめんとて娘を都に出す母

の心掛

〔短歌〕胸底

再生

婦人の政治運動

廣田花崖訳

一安八重壽

山下 清

吉野 作造

(楠 男生)

〔野口精子〕

安井 哲子

海老名 彈正

新渡戸 稻造

海老名 みや子

麻生 正蔵

志立 たき子

堀内 ます子

片岡 浩三

長谷川 清子

吉野 作造

36

35

35

23

28

27

24

17

10

5

2

愛子

白い花

時事其折々

○歐洲戦乱と吾国の貿易

随感

礼と心と

野趣を味へ

男女の作法

沖の嵐

帰り来て

編輯局より

第七卷 第六号 (大正4・6・1)

〔短歌〕はつなつ

信賴と感謝

母たるの光榮

家庭と宗教 (宗教生活は理窟でない)

日支交渉の解決

〔詩〕さゝやき

信仰と婦人

〔新刊紹介〕

廣田花崖訳

橋本ゆき子

一 記者

しづ子

みや子

哲子

内池よね子

せい子

(せい子)

せい子

36

35

35

23

28

27

24

17

10

5

2

〔1〕

36

35

35

23

28

子供の宗教教育問題

一、子供の宗教々育に就ての御意見

一、現在お子供に對し取つてお出になる

宗教々育の方針

○子供の宗教々育に就て 志立たき子○忠愛精神の涵養

高田研安○人類並に凡ての生物に對して愛をもつこと 谷

津直秀○敬虔なる信念の教養 羽中田ための○日常坐臥神

恩を感謝するの心 左近義弼○皆様の御意見を伺ひ度い

杉山恒子○新女界の問に對して 松浦政泰○白絹の様に潔

く軟い心を神にまで 小林悦子○新女界の御尋ねに對して

岡田哲蔵○天地自然の偉大なる力を感得せしむべし 井上

秀子○家庭教育と教会との一致を要す 加藤延年○子供に

宗教教育の必要なること云ふ迄もなし 赤星仙太○母親の

信念次第 江原素六○幼き時より宗教心を養ふべし 小崎

千代○子供の宗教教育は母の胎内より始むべし 金森通倫

○宗教的氣分を漂はせて 安部磯雄○自然美を通して 内

ヶ崎作三郎○家庭礼拝を行へ ジー、エム、フィッシュャー

婦人矯風会の活動

愛子 廣田花崖訳

うたがひ 伊藤 恵子

家庭博覽会につきて 海老名一雄

梅の貯へ方

海のあなたへ 野口せい子

27

涼しいお菓子と飲物

洋服の仕末方・手袋

朝鮮なる旧知の友并に末見の友を想ひて

雪子病床の日記より

随感

家庭博覽会を見て

親切な車掌

油虫の教訓

感じのまま

贈物に就いて

研究的の態度を取れ

編輯だより

第七卷 第七号 (大正4・7・1)

〔短歌〕五首

暑中休みと家庭生活

靈界の消息

神の国の建設

今度の議會

鮮満伝道遊行記

ポプラのそよぎ

京城より

手塚かね子

記 者

海老名みや子

手塚 新

海老名みや子

野口せい子

みや子

加藤りつ子

ます子

ます子

(精 子)

渡瀬 常吉

安井 哲子

海老名彈正

伊藤 一隆

吉野 作造

海老名みや子

渡瀬 常吉

127

21

14

10

5

2

[1]

72

71

鎮南浦より	石田 貞蔵	28
平壤より	栗原陽太郎	29
愛子	廣田花崖訳	30
熱帯国道中記	柳 悦耳	40
消化とキャベツ	久保 竹二	46
〔短歌〕ノートの端より	中村 春二	47
休暇中の児童の取扱方	上村 邦良	51
都を北へ三十里	一安八重壽	55
〔詩〕ジョージの祈		56
種々なる土曜の夕		
○或土曜の夕 相原一郎介○全き解放は睡眠の時 三沢糾		
○涙するほどしんみりと考へ度い 小橋三四子○一番たの		
しみな晩 元良よね子○ホームの一隅から 百合子○天来		
の響 浅草の一女教師○明日の準備をしつゝ 三田しづ子		
○新家庭の土曜の一夜 藤田逸男 同李花○幾分か伸びや		
かな気持で さゝがに○人間らしひうるほひ 安井てつ子		
○一番忙はしむ時 内々崎作三郎○土曜日の日記の中から		
堀内ます子○桜楓会托児所の土曜日 その裸婦		
御挨拶(鮮満の皆様へ)	海老名みや	64
母様より(はがきだより)	みや子	66
家庭欄		71
○カラ、カフスの洗ひ方 一 記者		72
編輯だより		

第七巻 第八号 (大正4・8・1)

〔短歌〕五首	安井 哲子	〔1〕
七月の経験	海老名暉正	5
基督の人世観		
〔余は花を愛す……〕(病床録より)		8
児童教育に就いて	三田谷啓(演)	9
実見したる開戦前後の倫敦	二階堂とくよ	18
再び茶臼原より	松本 圭一	22
慈愛館訪問の記	堀内ます子	27
愛子(承前)	廣田花崖(訳)	33
夏期の注意	松村彌祐談	45
仙人掌の話(上)	加藤 延年	48
避暑地などで出来るお菓子		50
家事と料理	小 菰	51
面白い絞り染めの仕方	西野みよし	52
来客用献立		55
鎖夏のいろく		55
妙義から前橋へ	藤田 逸男	55
三日間の日記	野口 幽香	60
日記の中から	堀内ます子	63
日記の中から	吉野 作造	65
嬉しき一日	上村 邦良	69

婦人の理想と子女の教養

我党の貞操論

社会問題として研究すべし

信仰生活によりて徹底せよ

自家人格の威厳の操守

純潔なる夫婦関係が即ち貞操の真義

神意の發現として尊重すべし

結婚以外絶対に異性と関係せざること

余の見たる貞操問題

男女に拘はらず人間の貴く可き主義

霊と真との泉を汲むべし

再婚は止め度い

何物の侵入を許さざる權威

米國より (一) (二)

御大典記念樹

海老名夫人講話 (八月十六日日米新聞より)

〔短歌〕

よるの聲

〔詩〕落魄・にくしん

湘南めぐり

〔詩〕流れ

此頃のお総菜

聞より)

麦領と海老名夫人 (八月十九日日米新聞より)

海老名みや子

浮田 和民

三井 北川

三沢 糾

村田 勤

大橋 廣子

富永 徳麿

綱島 佳吉

羽中田為野

山室 軍平

武本喜代蔵

野口 末彦

海老名みや

加藤 延年

十六雄

北見くら子

市橋 俊夫

一記者

〔詩〕感激

編輯だより

第七卷 第十一号 (大正4・11・1)

〔詩〕奉祝歌

〔奉祝の辞〕

御大典に対する所感

復活の意義

御大典に際して女学校は (一)

御大典に際して

現代の我国婦人に対する希望

切実なる希望の一端を述べ

基督の精神に触れよ

救世軍の新事業

大嘗祭に就て

我国女子の将来を想ふ

吾院の記念事業

〔新刊紹介〕

○『人生日訓』内ヶ崎作三郎著

御大典記念運動と矢島会頭

御大典に際して女学校は (二)

戦局バルカンに及ぶ

〔短歌〕御大典を祝して

市橋 俊夫

(精子)

安井 哲子

海老名 弾正

浮田 和民

安部 磯雄

ストーデ博士

山室 軍平

新渡戸稲造

内ヶ崎作三郎

金子 尚雄

守屋 東

吉野 作造

せい子

女子の高等教育問題	成瀬 仁蔵	14
〔短歌〕浅間山麓	中山 忠直	16
家庭に於ける注意すべき学校教育	塚本はま子	17
〔新刊紹介〕		21
○『婦人画報』婦人週報社発行○『女王』	女王会発行	
我国の婦人に対する希望	志立たき子	22
独逸化学者の努力	渡辺 忠吉	29
病院 物語	廣田花崖訳	39
ジョー		
お伽噺	阪本 花代	48
三部の書籍を抱いて嫁いだジョン・パンヤ		
ンの妻	川副 櫻喬	51
見果てぬ夢	海老名みや子	54
児童学瑣談	三田谷 啓	59
凸凹の道	松本 芳江	60
歌集夕ばえの著者へ	鼎浦 漁史	63
故小林あや子刀自屢歴		65
乳児の取扱につきて注意すべき件々	山下 清	67
随感		
再び憤慨に余る事ども	みや 子	69
謹告	藤田 逸男	70
	新社会計係	71
編輯だより	(精 子)	72

第八卷 第一号 (大正5・1・1)

新年の所感

新生の歎喜

今度の議会に於ける外交問題

婦人の手に俟つべき政治問題

〔新刊紹介〕

○『聖書日日実行訓』中尾清太郎編

銀座書房出版

サンタクロース

楽しきクリスマス

現時生活の混乱状態

亜米利加にての聖誕節

目ざめ(小説)

詩人コウパーとメリーアンウキン

〔詩〕あけぼの

〔戯曲〕ダヒデの邑へ

新女界〔公告〕

〔戯曲〕トムターの訪問

植物園の南蛮木

〔短歌〕クリスマススを祝して

楽しきクリスマススの晩餐献立

師走の家より

思ひつく事ども

此頃の私の家

安井 哲子

海老名 彈正

吉野 作造

安部 磯雄

倉橋 惣三

H S

海老名 みや子

植村 環子

廣田 花崖

林 静太訳

野口 せい子

菅 笠夫

新女界同人

阪本 花代訳

北見 くら子

手塚 かね子

井深 花子

海老名 みや

69

67

66

63

懐かしい我家の師走

父ちゃんクリスマスは?

忌中の張札をして

忙はしなかった今日

汽車の中から

編輯局より

第八卷 第二号 (大正5・2・1)

〔短歌〕二月

真に強き人

新しき愛

教育上に於ける母親の責任

醒めよ若き婦人

〔短歌〕三首

南支那の動乱

イスラエル王と其の予言者

朝鮮の女子教育に就て

母の遺言

感激せる露西亞の少年

文子の臨終

非難の多い日本婦人

現時生活の混乱状態(二)

藤田 逸男

相原 一郎介

有田 四郎

野口 精子

大塚 尚

(精子)

80

78

75

74

72

71

せい子

安井 哲子

海老名 彈正

中村 春二

長井 長義

松本 芳江

吉野 作造

西内 天行

松本 雅太郎

廣田 花崖

渡辺 白鷹

49

46

43

33

28

22

17

16

13

9

5

2

〔1〕

志立 たき子

海老名 みや子

55

49

46

43

33

28

22

『新女界』総目次 ⑧2—⑧4

〔新刊紹介〕

○『幼児の精神査定及幼児の取扱法』三田谷啓著 児童書
院・南江堂書店発売
異常児童の教養
幼稚園便り

婦人の美

折にふれて

台所手帳 スープの製法

洗濯の話

編輯だより

第八巻 第三号 (大正5・3・1)

〔短歌〕三月

女子と自衛

家庭の基盤

子供を小学校に入学せしむる父母の為に

児童教育と米国視察談

〔詩〕ひとりばっち

児童教育と活動写真

〔短歌〕生命の春

奈良より

最近の政況

60

三田谷 啓

たのしき子

(古瀬なみ)

(みや子)

(精 子)

(せい子)

安井 哲子

海老名 彈正

高島 平三郎

岸辺 福雄

市橋 俊夫

三田谷 啓

北見 くら

愛 子

吉野 作造

26

25

25

20

19

15

11

5

72

イスラエル王と其予言者 (続)

詩人コウパーとメリー・アン・ウキン (続)

母の遺言 (続)

現時生活の混乱状態 (三)

新人生及び其家庭に対し私の希望

中学、女学校の選定と入学前後の家庭の注意

〔詩〕おもいて

雛祭につきて

随感

小鳥の天然銅に就て今一度・手近な改良

読者の領分

○母の感謝 (長崎一読者) ○偽りなき心を神に (古瀬なみ)

氣持のよい雑誌

手帳なお菓子づくり方

編輯だより

(愛 子)

(精 子)

松宮 信子

海老名 彈正

安井 哲子

せい子

〔短歌〕四月

新学年の感想

基督の福音

主人公は何処に?

10

5

西内 天行 33

林 静太 36

廣田 花崖 44

海老名 みや 55

三谷 民子 61

海老名 みや子 63

十六 雄 65

野口 幽加子 66

みや子 67

69

70

71

72

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

〔1〕

羅馬尼王母陛下	吉野 作造	11
児童の養護	三田谷 啓	14
愛の蘇生 (サイラス・マーナー) (一)	エリオット作 高橋 茂訳	20
〔短歌〕桜貝	有田 四郎	27
〔短歌〕二首	(精 子)	27
蜜柑壳	サラ・ダブリュー・フライ著 廣田花屋訳	28
現時社会の混乱状態 (其四)	海老名みや子	39
〔社告〕読者の領分新設		43
現代社会に対する我等の不满		45
弱者虐めの旧道徳をいやしむ	安部 磯雄	46
絶対的信念の缺乏	高島平三郎	48
当に改悔すべき時	成瀬 仁蔵	54
男子は卑怯なり	宮田たか子	55
不满より寧ろ希望の点	長井 長義	57
特に婦人に関する方面について	相原 一朗介	59
数へ来れば限りなし	山室 軍平	60
カゾヘウタ	高田 畊安	61
読者の領分		63
○亡三児の一週忌に 吉田とも子○昔が偲ばれて 市橋俊		
夫○真実なる生活 美智		
美味しい野菜の煮方	松宮しん子	66

隨感	ます子	67
親と子	精 子	68
今日のこと	みや子	70
桜の花	海老名みや子	71
不满中の不满		71
内ヶ崎先生より		71
編輯局より	(せい子)	72
〔短歌〕五月	せい子	[1]
患者としての新経験	安井 哲子	2
〔短歌〕三首		4
基督者の生活と恩恵	海老名弾正	5
使命を自覚す可き日本婦人	笠井 重治	10
愛の蘇生 (サイラス・マーナー) (二)	エリオット作 高橋(茂)訳	16
光の子	高橋(茂)訳	16
一国文明の進歩は男女の協力に拠る	三谷 民子	22
社会改善の問題	高野 重三	27
一、現代の社会及び家庭に於て改善すべき要件		
一、貴下は何れの点より其改善に着手せらるゝや		

〔短歌〕六首

せい子

鹿子木歌子略伝

鹿子木員信

〔追想のさまへ〕

39 34 33

○就眠前の母 鹿子木艶子○武彦の小さき心にも 鹿子

木練子○陰徳の教訓 村山静子○牡丹を見に行つた思出

海老名みや子○「思出の記」の節子と思ひ出す 浅原文

平○忍耐の徳 井上鶴子○良妻賢母の手本であつた徳

富しづ子○鹿子木刀自を偲ぶ 妹尾みせ子○鹿子木御尊

母様を御慕ひ申て 炭谷小梅○此度は天国で 野口せい

子○人生の勝利者 海老名弾正○真に覚悟のよい御方

野口末彦

エリオット作

愛の蘇生(サイラス・マナー) (三)

高橋 茂訳

夏期休暇に就いて

海老名みや子

理想的簡易生活の家

一 記者

読者の領分

○可能性の自覚 英子

随感

(ゆめみる人)

朝こゝち

衣服の仕舞方 (読売新聞より)

72 71 69

第八巻 第七号(大正5・7・1)

〔短歌〕七月

せい子

〔1〕

〔同人主張〕

戦争と婦人の領土拡張

何故に女子の教育は男子に劣るか

幼児の追懐(花の日礼拝説教)

家庭教育の根底を宗教に据えよ

知恵の上から見た親子、同胞

来るべき休暇を有効に過すには

袁世凱及其遺族

児童の養護 (三)

金魚のお医者様

戦争と婦人

愛の蘇生(サイラス・マナー) (四)

故岩村元子刀自を偲ぶ

胃腸病食餌療法

此頃の朝いろく

○六月十八日 堀内ます子○最近の我家 美や子○加茂の

朝霧 加藤延年○寄宿舎の夏の或朝 としを○新住居の或

朝 野口精子○葉書に答へて 沢村かず子○花まつりの日

の午前 山名英子○浅間の曙 栗原香陽○つゆ晴 わたせ

○〔短歌〕新緑のかほり 内ヶ崎生

随感

外国少女より受けし刺戟

坂本 花代

65

(薫 風 生)

(藤 田)

海老名弾正〔演〕

江原 素六

松本亦太郎〔演〕

西山 愨治

吉野 作造

三田谷 啓

海老名みや子

エリオット作

高橋 茂訳

北見くら子

岩井 縣

52 48 46

38

34

33

30

25

22

15

一隅より	印度のお客様	編輯局より	〔同人主張〕	家政外に發展する女子の能力	婦人と知識の家庭化	趣味を養ふための努力	女子の月桂冠	日本の婦人は何故発達せざるか	戦後に対する日本の準備	南洋土産話	手輕な洗粉の製法	兒童の養護 (四)	〔詩〕 あれ飛行機が	愛の蘇生 (サイラス・マーナー) (五)	感謝と思出	〔詩〕 只二途のみ	逝ける山室夫人	亡妻の事ども
精子	(せい子)	(雲山)	(藤田)	(蕉風生)	海老名彈正	志立たき子	吉野作造	鶴見祐輔	三田谷啓	芳江	エリオット作	高橋茂訳	海老名みや子	廣田花崖	安井哲子	山室軍平		
69	70	72	1	3	7	13	18	23	29	30	34	35	44	48	49	51		

山室夫人の死をいたむ	海老名みや子	53
〔短歌〕山室夫人をいたみて	野口せい子	55
忘れぬ夏の海と山		56
○順礼の旅 小山喜美子○三〇余年前の回顧 杉山恒子○健康体で過した最後の夏 廣田花崖○宮津に旅せし夏 沢村かず子○久能山東照宮 平田千代子○思ひ起す十年前谷津直秀○去年の夏 辻忠良○妙義登山 阪本花代○十三歳の夏 久布白落実○確氷のある地にて 別所梅之助○海を巡りて 栗原陽太郎○アイヌ村を走った夜 守屋東子○夏の自然 加藤延年○軽井沢の夏 鈴村不二子○此頃の思ひ出 星花○子供相手に草を取る 内ヶ崎生○海の香 須藤曉風		
鶏肉と胡瓜馬鈴薯のサラダ・マヨネーズ		71
編輯だより	(せい子)	72
第八巻 第九号 (大正5・9・1)		
〔短歌〕九月	せい子	〔1〕
同人主張		2
実行の秋希望の秋		2
時間の励行は第一のふみ出し		3
仕事の秩序経綸		4
世界的衣食住		5
恐るべき家庭教育		7

神の基督

児童の養護 (五)

〔詩〕子守歌

スウキフトとステラの交情

帰省中の一日

花かげの思ひ

〔短歌〕和歌浦より

上総より

ホーム、スキート、ホームにつきて

愛の蘇生 (サイラス・マーナー) (六)

家庭で労働の訓練を与へよ

大学臨海実験所を訪ふ

山の日記

思出の記

〔新刊紹介〕

○『不用意が招く愛児の死』河合三郎著

洛陽堂発行

随感

或日のこと

服装の調和

美は弱からず

蔭の友情

コールドダストより

海老名弾正

三田谷 啓

廣瀬 渡

林 静太訳

三谷 民子

さだを

市橋 俊夫

北見 くら

千田時次郎

〔エリオット作〕

高橋 茂訳

海老名みや子

堀内 ます

ま す

S 子

64

63

61

56

51

41

35

34

料理切りぬき帳

編輯だより

第八卷 第十号 (大正5・10・1)

〔短歌〕十月

主張

伝道の急務

忙はしき世に処する心懸

新しき生活

クリスチアンの情操

東西戦局の形勢

日常生活の改良

精神界の経済

〔新刊紹介〕

○『床上の歓喜』廣田花崖著

キリスト教興文協会発行

虎列刺の予防に就て

〔短歌〕病牀にて

児童の養護 (六)

〔詩〕一篇

蜜柑壳

サラ、ダブリュウ、フライ著

初秋雑感

廣田花崖訳

51

(精 子)

72

せい子

71

(m 子)

(1)

(紫 海)

2

(薫 風)

2

海老名弾正

7

吉野 作造

13

山脇 玄

17

河井道子〔演〕

23

栗本 庸勝

26

長谷川英太郎

27

三田谷 啓

32

市橋 俊夫

33

廣田花崖訳

37

野口せい子

39

廣田花崖訳

51

野口せい子

51

廣田花崖訳

39

廣田花崖訳

51

悪友の誘惑
婦人子供博覧会印象記

尾田信忠〔演〕

みや子

〔新刊紹介〕

○『貯金の出来る生活法』 家政研究会発行

主婦の爲め（輩の鑑別法並に松茸の料理法）

小児の挫骨に就て

台所改善に就いて

桑港より

編輯だより

第八巻 第十一号（大正5・11・1）

伝道号発刊につきて

天の父

人生意気に感ず

天来の慰安

運命と摂理

我を救はん者は誰ぞや

伝道の急務

健全なる信仰

神恩記

故湯浅茂世子刀自

故小林富次郎翁の事ども

〔短歌〕星のささやき
「予言者エリヤ」（イ、ア、ブーニンよ
り）

何故に伝道するか

何故に伝道がしたいか

基督に依れる婦人の力

真に救はれたる者の幸福

世界人類の幸福のため

主イエスを信するに依りて

金が伝道の動機

神の国を建つるため

是ではすまぬといふ情から

初秋の衛生的料理

〔短歌〕つたもみぢ

故山室夫人の日記より

〔うめくさ〕

編輯だより

第八巻 第十二号（大正5・12・1）

〔短歌〕十二月

信念の教養

修養の根本義

野口せい子

三咲生〔訳〕

吉野 作造

三谷 民子

廣岡 淺子

河井 道子

高田 畊安

ミス、ミリケン

渡瀬 常吉

三田谷 啓

長尾 半平

松宮しん子

有田 四郎

S 子

（精 子）

せい子

海老名彈正〔演〕

女学生の倫理宗教観

児童の養護(七)

声の話(美声術)

〔短歌〕寂しき面

蜜柑壳(続)

不思議な生命

〔短歌〕魂のひらめき

婦人の服装に就て

東西最近の形勢

あたゝかいお料理

婦人の使命

〔うめくさ〕

黒い猫

〔詩〕一篇

手軽で重宝な染色法の一二

可愛い手すざび

安価にして優良なる副食物

編輯日より

第九卷 第一号 (大正6・1・1)

〔口絵〕クリスマススの鐘

栗原 玉葉

横山 雅男

三田谷 啓

千田時次郎

有田 四郎

廣田花崖訳

岡崎小文訳

北見らく子

志立 たき

吉野 作造

松宮しん子

鶴崎康午郎

(あやの)

坂本 花代

市橋 俊夫

一 記者

ます 子

岩井 縣

(せい子)

12

16

20

25

26

37

45

46

49

55

65

59

60

62

63

67

70

72

〔詩〕天のよろこび・地のどよみ

クリスマスと正月(感想のまゝ)

神の栄光

児童とクリスマス

習慣養成の必要

児童の保護事業

自己中心主義と児童中心主義

支那の特派派遣中止問題

手軽なクリスマススの御菓子

〔短歌〕降誕節を祝して

小さい白靴

〔たのしいクリスマス〕

○主を待つ心 鈴木栄○待遠しいくりすます

クリスマスノウタ 村山正之助○サンタクロースのおぢいさん

蜜柑壳(続)

子供のお話

台湾のお話

若き母の日記より

〔詩〕一篇

〔短歌〕親心

野口せい子

(安井)

(みや)

海老名弾正

三田谷 啓

高島平三郎

高田 慎吾

高峰博(演)

吉野 作造

(しん子)

北見くら子

浅田 須磨

日曜学校生徒

中田久子○

〔サラ、ダブリュウ、フライ著〕

廣田花崖(訳)

石橋 臥波

海老名みや

倉橋 惣三

齊木 仙醉

安田 尚義

68

『新女界』総目次 ⑨1—⑨3

幼な児の如くに

〔詩〕一篇

雛絵の画会趣意書

編輯だより

今井 昭綱

せい 子

〔有田四郎〕

(せ い)

69

70

71

72

第九卷 第二号 (大正6・2・1)

〔短歌〕二月

学校選定に就て

興国の精神

児童の養護 (八)

母親の保護

読書の影響と夢

母の領土

蛇の話

〔短歌〕如月のころ

蜜柑売 (統)

〔サラ、ダブリュウ、フライ著〕

広田花塵 (訳)

新刊紹介

○『若き婦人の行く可き道』沼田笠峰著 洛陽堂出版○『

涙の花籠』クリストッフエ、シュミード作 高田尚賢 松

本雲舟共訳 愛人社

〔短歌〕冬籠り

北見くら子

48

47

37

35

31

27

22

18

12

6

2

せい 子

(1)

第九卷 第三号 (大正6・3・1)

〔短歌〕三月

新学年を迎ふる小学児童に就て

聖旨に服するの歓喜

米独の国交断絶

〔新刊紹介〕

○『婦人の精髓は』林静太編訳 警醒社発行

雛祭より受くる教訓

雛の節句の献立 (婦人週報より)

小学教育の新しい試み

分り切った事と同情

あめりか便り

〔新刊紹介〕

小窓のほとり

哀はれな小供

虚栄心の養成 (児童研究より)

故小倉八重子嬢のこと

祈の力

主婦雑誌帳から

雛絵の画会趣意書

編輯だより

野口せい子

大西 孝美

岩佐 春治

花 崖

一 記者

〔有田四郎〕

(精 子)

72 71

せい 子

海老名彈正

吉野 作造

高島平三郎

西山 愨治

高峰 博

阪本 花代

28 26

22 20

19 17

16 11

6 2

○『主婦の友』 東京家政研究会編刊

人形病院の此頃

盗賊から聖人へ（ゼリーマコーレー小伝）

〔短歌〕如月の春

児童の養護（九）

声楽に志す人の為に

雛祭の思出

主婦としての心掛け

台所雑感

主婦のノートから

編輯だより

第九巻 第四号（大正6・4・1）

〔口絵〕小田川ゆう子刀自写真と海老名夫人

人によせられし書翰の一節

新女界主張

芳川家の不祥事

世界の大勢に悼させ

総選挙と婦人

私信に寄せて

〔短歌〕一首

芥種の信

堀内ます子

廣田 花崖

北見くら子

三田谷 啓

〔ミリ、ライアン原作〕

千田時次郎訳

M 子

西崎あやの

元良よね子

（精 子）

29 35 48 49 56 63 65 68 71 72

内外昨今の形勢

日本婦人の平和事業

かなだ便り

悲惨なる一家庭の話

草餅・桜餅・さわら桜むし・筍いか木
の芽へ

声楽に志す人のために

小田川ゆう子刀自記念

〔短歌〕追懷

亡き母の生涯

小田川ゆう子刀自を追想す

〔ゆう子刀自葬儀〕弔詞

小田川刀自を憶ふ

露国 俗語詩二つ

寓言

小雛菊の墓

説 兒童の養護（一〇）

膝の上の教科書

〔短歌〕慰安百首の中より

床の間のかざりに就て

○鳥旦照焼○かんびょうあちやら煮

○てっか味噌○酢牛蒡

主婦のノートより

吉野 作造

海老名一雄

阪本 花代

高峰 博

千田時次郎

野口せい子

花島 豊子

海老名彈正

小崎 弘道

せい 子

三 咲 生

廣田 花崖

三田谷 啓

巖谷小波〔演〕

高松 静江

あやの

一 記者

70 69 67 65 62 60 51 47 45 44 43 37 36 35 31 30 27 26 21 15

『新女界』総目次 ⑨4—⑨6

編輯だより

第九卷 第五号 (大正6・5・1)

新女界主張

永遠迄続く精神的活動

Universal Sisterhood

婦人議員の奮斗

〔詩〕一篇

宗教改革の精神

総選挙の道德意義

米国に於ける禁酒運動

児童の養護(一一)

〔短歌〕五月の野より

自然と技巧

蠅の話

〔本郷教会〕会堂新築募金趣意書

小雛菊の墓

無理な旅(エス、ゲセフ、オレムブルグス

キーより)

若葉の窓より

声楽に志す人のために

歌集に見えたる夢中作歌

手軽なお料理の話

(精 子)

72

(み や)

(K 生)

(Y 生)

市橋 俊夫

海老名 彈正

吉野 作造

網島佳吉談)

三田谷 啓

野口せい子

高峰 博

谷津 直秀

廣田 花崖

三咲 生訳

野口せい子

千田時次郎

高峰 生

井深 花子

70 67 60 56 48 39 38 34 28 27 23 19 13 7 6 5 3 1 1

編輯だより

第九卷 第六号 (大正6・6・1)

新女界主張

初夏の自然と此頃の婦人

女学校の教育を何うにかしたい

一牧者、一群羊

婦人と読書趣味

書齋にて客と

「早教育と天才」に就いて

〔短歌〕しほがまの海にて

ならより

教育改革の急務

文野と今昔

婦人と静座

遺伝学上より見たる系図の研究と祖先崇拜

声楽に志す人のために

〔短歌〕春を惜みて

児童の養護(一二)

小門の狼

婦人に向上心を養はしめよ

〔歌日記の一節〕

台所経済の話

(精 子)

72

(み や子)

(Y)

海老名 彈正

高島平三郎

吉野 作造

藤田 逸男

よゑる

あい子

向軍治(演)

高峰 博

岸本能武太

永井潜(談)

千田時次郎

北見くら子

三田谷 啓

廣田 花崖

西崎あやの

みや子

65 64 61 49 47 46 43 39 35 29 23 22 22 17 14 11 7 6 1 1

手軽の料理

子守唄

蟻の防禦・洋傘を拭く事・真綿の黒く

なつた物・綿屑は軽石で

編輯だより

第九卷 第七号 (大正6・7・1)

同人随感

帰省する女学生方へ

暑くなつたら

基督と弟子達との共鳴

現代の日本婦人

児童と暗示

〔うめくさ〕

〔短歌〕父母を憶ふ歌

小門の狼 (二)

児童の養護 (二三)

転地と小児

小児及青年の家出

蚤の話

大戦後に於ける婦人問題

欧州戦後日本婦人の覚悟

婦人各自頭上の責任

一 記者 68

松本 芳江 70

(せい子) 72

71

(み や) 1

(よ ね) 5

海老名 彈正 7

高峰 博 14

今井 昭綱 20

よ ね 24

安田 尚義 25

廣田 花崖 26

三田谷 啓 39

山下 清 41

高峰 博 44

谷津 直秀 47

宮田脩(談) 50

内々崎作三郎 55

問題中の問題

婦人問題の一片

先づ実力を養へ

戦後の要求に応じて立ち得るや

目前の緊急問題

果物と台所の経済

家事雑誌

百号を記念するとて

新刊紹介

○『夢学』高峰博著 有文堂發行

編輯だより

第九卷 第八号 (大正6・8・1)

〔短歌〕八月

勝者の誇を以て盛夏と斗へ

神の恩寵

安井哲子先生の御講演を伺ふた日に

復辟運動の失敗

新刊紹介

○『養生の話』高橋信 洛陽堂發行 ○『さんばう主義』大

江すみ子著 宝文館發行

現代の日本婦人(其の二)

三沢 糾 60

小山 東助 63

相原 一郎 67

吉野 作造 71

山脇 玄 77

みや 子 82

あや の 85

編 者 86

せ い 子 87

せ い 子 88

せ い 子 〔1〕

(み や) 2

海老名 彈正 5

掛井 岩子 10

吉野 作造 11

16

17

高峰 博 17

17

児童の養護（一四）

菫蒲の浜まで（『日光紀行』）

説門の狼（三）

いろ／＼の御手紙とそこのおかへし

夏の花ぐさと歌

〔短歌〕海をうたへる

海の外より

最近の出来事から

声楽に志す人のために（続）

目前の緊急問題（承前）

愛の手（地方の教会をめぐるて）

紋り染を見る（本郷教会有志夫人方の）

編輯だより

第九卷 第九号（大正6・9・1）

〔短歌〕九月

共同生活の効果

砕けたる魂

日本人の食物問題

理想の婦人（英国女学校教員會議の決議）

活きた教訓

旅中に得た教訓

三田谷 啓 23

三咲 生 27

廣田 花崖 35

野口せい子 46

中川 松花 52

とみ 子 54

坂本 花代 55

海老名みや 58

千田時次郎 63

山脇 玄 65

青木 児談 68

記者 70

72

せい子 〔1〕

（みや子） 4

海老名彈正 5

長井 長義 9

高峰 博 13

（せい子） 17

安井 哲子 18

露国童話「ミハエルの生立ち」

実験 個人伝道の力（上）

告白 児童の養護（一五）

書窓漫筆

東山荘に於ける家庭の集ひ

御殿場の一週日

久里浜に遊びて

磯だより

山荘日記

編輯だより

第九卷 第十号（大正6・10・1）

〔短歌〕十月

礼儀と習慣

罪惡の根絶

誘惑に勝つの道

個人の価値と宗教の力

〔書簡〕吉野博士より野口奥様

児童の養護（一六）

拘泥といふ事につきて

幅物も秋に干したい・干物張物に注意

秋の女

三咲 生 22

廣田花崖 35

三田谷 啓 44

野口 生 47

栗原 基 50

海老名みや子 52

堀内 ます 60

須藤 曉風 67

あや子 69

（せい子） 72

せい子 〔1〕

（みや子） 4

海老名彈正 5

谷津 直秀 11

ペー宣教師 15

三田谷 啓 17

高峰 博 22

不 26

喚 27

露国話ミハエルの生立ち(統)

〔短歌〕秋のうた

実験告白個人伝道の力(中)

最近の戦局に就て

手帖の中から

常食用としてのパンの価値

新刊紹介

○『親心』小倉徳太郎著

パンの副食物に就きて

救世軍療養所を訪ふ

日記の中より

編輯たより

第九卷 第十一号 (大正6・11・1)

〔短歌〕十一月

落葉のさゝやき

税吏罪人の友

家庭と社会

現代に於ける婦人の責任

大暴風雨と女子教育

全国被害統計

土耳其の政変

三咲生 28

とみ子 39

廣田花崖訳 40

吉野作造 49

K生 54

長井長義 56

村松石子 61

堀内ます子 64

みや子 70

せい子 72

せい子 72

せい子 72

せい子 72

(みや) 2

海老名弾正 5

安井哲子 9

渡瀬常吉 15

高峰博 19

吉野作造 30

新刊紹介

○『子供一日一善(一月の巻)』田村直臣著

児童の養護(一七)

紋り染に關してお答

〔詩〕ある日の朝

目録を讀みて不喚先生へ

実験告白個人伝道の力(下)

安川さん

〔短歌〕師の君をしのびて

私信の中より

裁縫科と児童個性の観察

安川あい女史畧歴

ヂャムの製法

編輯だより

洛陽堂發行

三田谷啓 35

一記者 37

宇佐美不喚 38

野口せい子 40

廣田花崖訳 45

山本亀市 53

鈴木浪 59

故安川あい子 62

山本亀市 66

村松石子 70

(せい子) 72

第九卷 第十二号 (大正6・12・1)

〔短歌〕十二月

クリスマスを迎ふる前に

見えざる力

教育と信仰

現代生活と婦人

神へ向ふの生活

34

三田谷啓 35

一記者 37

宇佐美不喚 38

野口せい子 40

廣田花崖訳 45

山本亀市 53

鈴木浪 59

故安川あい子 62

山本亀市 66

村松石子 70

(せい子) 72

せい子 72

(みや子) 2

海老名弾正 5

安井哲子 9

渡瀬常吉 15

麻生正蔵 16

新渡戸稻造 23

谷津直秀 23

谷津直秀 23

谷津直秀 23

最後の勝利何れに在りや

〔詩〕一篇

児童の養護（一八）

予譲とうるしかおれ

失へる宝

降誕祭に就ての希望

人には恵みあれ

心の写真を交換する気持で

降誕祭を迎へんとして

贈物のいろく

麵麴の種類

科学の世界

十二月の総菜

編輯だより

謹告

第十卷 第一号（大正7・1・1）

〔口絵〕聖母子

〔巻頭短歌〕〔初春のうた〕

根本の修養

新人の誕生

〔短歌〕三首（十二月のうたより）

基督教主義の女子大学

吉野 作造 28

不 喚 36

三田谷 啓 37

高峰 博 41

廣田花崖 45

河井 道子 55

ミス、ホルセー 57

三谷 民子 58

井深 花子 59

みや 子 62

長井 長義 64

柿沼 宇作 68

（精 子） 71

（精 子） 72

巻末

ルーベンス筆

（せい子） 〔1〕

（みや子） 2

海老名彈正 5

新渡戸稲造 11

新設せら 東京女子大学
れんとする

新刊紹介

○『小供一日一話三月の巻』田村直臣著

女子教育の主眼は何処に置くか

女子の高等教育

戦乱中に閃く正義の光

ユダヤ教の現状

不思議な植木鉢

朝鮮の興夫伝

お断り

独逸のクリスマス

救世軍のクリスマス

クリスマスに所感

クリスマスと大晦日とお正月

科学の世界

主婦のため（手軽料理）

御挨拶

編輯だより

第十卷 第二号（大正7・2・1）

〔教説〕

神は霊と真理を以て拜すべきなり

結婚に関する基督の教訓

〔説 苑〕

家庭の宗教々育に就て

安井 哲子 13

洛陽堂発行 16

富田脩（談）

高峰 博 17

吉野 作造 21

岡上 三咲 32

廣田 花崖 39

高橋 鷹蔵 45

長井 長義 54

指田 和郎 59

小崎千代子 62

ひろし 68

柿沼 宇作 70

松宮しん子 73

野口せい子 76

精 子 78

海老名みや子 79

海老名彈正 2

相原 一郎介 6

新渡戸稲造 12

米国婦人の家庭生活	林 千代子	18
新刊紹介		
○『母の心』高崎能樹著 洛陽堂発行	○『爐辺』安	22
○『母の心』高崎能樹著 洛陽堂発行		
中花子著 キリスト教興文会発行		
児童の養護 (一九)	三田谷 啓	24
故山名英子女史及辞世		27
〔追悼文〕		
故山名英子畧歴	(丘の人)	27
山名英子夫人の追懷	野口 精子	28
病床より〔海老名御奥様宛書簡〕	奥 きく子	31
故角館喜雄さんの履歴	平山 訓子	33
喜雄さんのお葬ひと其感想	森 栄子	34
〔文 芸〕	藤沢 貞雄	39
ルッソの懺悔録に寄す	染矢 為介	43
「若き日の為に」を讀みて	高峰 博	53
小詩 愛と死 (テニス)	古田第三郎	58
〔家庭料理〕本式ライスカレーの作り方	松宮しん子	60
時 評		
露独単独講和の真相	吉野 作造	61
婦人界時潮	青 霞	68
編輯室にて	(青 霞)	72

第十卷 第三号 (大正7・3・1)

〔教 説〕		
天国の嗣子	海老名彈正	3
英国に於ける婦人参政権運動	吉野 作造	6
〔説 苑〕		
女子教育と實際生活に就て	山脇 房子	18
天然と人間生活に就て	海老名みや子	23
途上印象 (ある二人の婦人)	海老名みや子	29
〔詩〕微笑	松野緑三郎	30
〔想 苑〕		
我生活より	野口せい子	31
聖書國觀 (1) 聖書國の家庭生活	吉田源治郎	34
文 芸		
沙翁所感 (マクベス)	古田第三郎	39
婦人界時潮	青 霞	48
家庭料理	松宮しん子	50
ある彷徨者の死 (小説)	廣田 花屋	52
嵐の夜に (小説)	染矢 為介	67
編輯室より		
杜 告	卷末	88

第十卷 第四号 (大正7・4・1)

〔教論〕

成功の栄耀と其暗黒
英国に於ける婦人参政権運動 (二)

感情の教育を高調す

基督教的非戦論の原理を説く

〔説苑〕

物価騰貴の今日に際して

一片の麵麴と一片の愛とを浪費する勿れ

〔想苑〕

〔詩〕審判の日は近づけり

沙翁所感 (マクベス) 前承

聖書国の家庭生活 (2)

〔随感〕

兄より

節約帳の中より

家庭料理

〔詩歌〕

〔詩〕我はひとりの少女を知れり

朝のひと時

若き説教者

伊豆山の浜

〔戯曲〕

陷穿 (一幕)

編輯室にて

〔広告〕朝鮮教化資金募集広告

社告

第十卷 第五号 (大正7・5・1)

〔広告〕朝鮮教化資金募集広告

〔教論〕

復活の靈能 (教壇)

英国婦人参政権運動 (三)

〔短歌〕晩春の歌

賤業婦の人格を認めぬ新判例

〔説苑〕

我国家庭の紊乱を歎いて男子の貞操を要む

王女としての生活

現代の主婦に食料の研究を望む

復活祭に當って何を神様に捧げる乎

北米カナダに於ては如何に児童を教養しつゝあるか

嬰兒及哺乳児死亡の最大原因に就て

想苑

生活の片影から

森田 俊作

(編者)

巻末

巻頭

海老名 彌正

吉野 作造

市橋 俊夫

一記者

海老名 彌子

岡崎 小文

徳江 道世

三谷 民子

坂本 花代

山下 清

野口 精子

42

37

34

別離(書簡)

ある日曜日に

聖書国の家庭生活

新刊紹介

○『飛行一寸法師』セルマ・ラーゲルレーヴ著

大日本図書株式会社発行

〔詩歌〕

イスカリオテのユダ

〔短歌〕元良米子夫人に

季節料理

編輯室にて

丘の人 48

浅田 すま 52

吉田源治郎 55

香川鉄蔵訳 62

ブカナン(原著)

古田第三郎(訳)

野口 精子 63

野口 精子 69

(記者) 71

編輯室にて 72

想 苑

生活の片影から

折にふれて

馬夫人の佳話

緑の環境

〔短歌〕

青葉の窓にて

三十路近うを

春雨の夜に

講義

家庭料理(味噌汁)

小説

明断

フランスス伝の中より

編輯室にて

野口 精子 37

岡崎 小文 43

清水 安三 44

浅田 すま 47

松本 芳江 50

深尾須磨子 52

鷺山さき子 54

徳江 道世 55

廣田 花崖 58

稲村 茂樹 63

(青電) 72

海老名彈正 1

吉野 作造 5

帆船理一郎 13

山下 清 20

〔教論〕

永遠の花(花の日説教)

英国に於ける婦人参政権運動 (四)(時論)

説 苑

婦人の経済的独立に就て(上)

婦人の自己擁護と自覚

第十卷 第六号 (大正7・6・1)

〔教論〕

母の賜物(教壇)

英国に於ける婦人参政権運動 (四)(時論)

説 苑

琉球の「カハオリ」と蟹の民謡

男子貞操論

此夏期休暇を如何に送るべき乎

此の新しき夏を如何に迎ふべき乎

第十卷 第七号 (大正7・7・1)

〔教論〕

永遠の花(花の日説教)

英国に於ける婦人参政権運動 (四)(時論)

説 苑

婦人の経済的独立に就て(上)

婦人の自己擁護と自覚

東京から奈良まで (一)

海の友へ (書信第二)

〔想 苑〕

思ひ出づるがまゝに

伊太利の旅の思ひ出

アッセルマアの夏の思ひ出

生活の片影から

ソロモン (ハイネより)

婦人界雑感二則

瀬戸内海から

〔詩〕たましひよ (小詩第一)

〔文 苑〕

エス様と小さな二人の姉妹

〔詩〕董の床に捧ぐ (小詩第二)

明断 (小説)

病める友へ (書信第二)

季節料理

編輯室にて

第十卷 第八号 (大正7・8・1)

〔教 壇〕

戦後の基督教

高峰 博 26

(十六雄) 30

海老名みや子 32

谷津 直秀 40

林 千代子 43

野口 精子 46

松島 穰訳 52

青 霞 54

島 の 人 57

(青 霞) 60

鳥谷部陽太郎 61

(青 霞) 63

廣田 花崖 64

(十六雄) 70

(貞 雄) 71

72

海老名彈正 1

〔説 苑〕

力を試されつゝある欧米婦人 (時論)

〔短歌〕海塵

婦人の経済的独立に就て

〔短歌〕停車場にて

想 苑

煙草吸ふ女と若き比丘尼 (東京から奈良まで、二)

〔短歌〕伊東にて

〔文 苑〕

「出家と其弟子」を讀みて

吾は灯台守なり

〔日記より〕

軽井沢に行く迄

瀬戸内海から

講義

家庭料理 (澄だ露もの)

編輯室にて

第十卷 第九号 (大正7・9・1)

〔教 論〕

基督と嬰兒 (教壇)

海老名みや子 7

市橋 俊夫 11

帆足理一郎 12

むねよし 17

高峰 博 18

深尾須磨子 25

藤沢 貞雄 26

ヘンリーブンダイク
古田第三郎訳 34

みや子 54

島 の 人 58

徳江 道世 61

(貞 雄) 64

海老名彈正 1

チェック、スロバックとは何ぞ(時論)

吉野 作造 4

第十卷 第十号 (大正7・10・1)

婦人の虚栄と被服の贅沢

帆足理一郎 7

〔短歌〕汽車の窓から

むねよし 12

軽井沢の生活と其收穫

海老名みや子 13

〔広告〕救済事業職員養成所生徒募集

藤沢 貞雄 22

基督教界の二傾向に就て

須藤 曉風 23

生ける信仰に就て

須藤 曉風 28

想 苑

移ろひ行く奈良(東京より奈良迄 三)

高峰 博 34

フランシス伝の中より

稲村 茂樹 40

処世聖き一週間(ゴールド、ダストより)

廣田花崖訳 44

瀬戸内海から

島 の 人 56

〔想片〕

北越の海辺より

古田第三郎 61

屋島を見るまで

辨 〔市〕 63

〔短歌〕夕の草

青 霞 64

通信欄

青 霞 65

○みや○野口精子○栗原玉葉○十六雄○中村○古田○櫻村

新刊紹介

66

○『しほりの図案』杉浦非水著 平安堂発売

貞 雄 68

編輯室より

貞 雄 68

〔教 論〕

予言者の精神〔教壇〕

海老名彈正 1

新大總統徐世昌を中心として(時論)

吉野 作造 5

〔時評三篇〕

家庭と食糧問題

帆足理一郎 11

乱脈なる日本の生活と其改良

海老名みや子 17

我国社会の渾沌に向つて

藤沢 貞雄 26

説 苑

地より挙げられし基督

藤沢 貞雄 28

〔想 苑〕

生活の片影より

野口せい子 35

さゝやき

十六 雄 41

「白もくげの蔭」より(ヴァキオリニスト)

深尾須磨子 45

H先生へ その二)

浅田 すま 49

寮舎に帰りて

青 霞 52

想 片

〔短歌〕甘藷蟲

深尾須磨子 53

〔詩〕蟋蟀

植山十六雄 54

雑感三則

青 霞 55

〔詩〕月明

十六 雄 57

雑 録

家庭料理講義（承前）

想片

読者欄

○A子○須藤暁風○山崎弘○貞子○浅田すま

〔詩〕 港の夕

あの灯まで

編輯室にて

徳江 道世
（青 霞） 62 61 58

おことはりの言葉

生命の扉（童話）

〔料理〕

家庭料理講義（承前）

編輯室にて

野口 精子
〔ウオズウオス〕
松島 藤訳 53

徳江 道世
（貞 雄） 60 57

第十卷 第十一号（大正7・11・1）

〔社 説〕

献身奉仕の実地教養

〔教 論〕

信仰生活の徹底（教壇）

独逸の内情に関する觀察（時論）

女子高等学校教育論

説 苑

モーセの祈禱（詩篇九十篇）

〔想 苑〕

同じ声、同じ心根、同じ心懸

ノートから

愛に目覚めよ

海老名みや子 1

海老名彈正 6

吉野 作造 10

帆足理一郎 19

ヘンリー・ヴァンダイク
浅田すま訳 27

高峰 博 35

高橋 茂 43

須藤 暁風 45

社 説

栄へある年の暮

教 壇

国民の改悔

論 説

歐洲戦乱と婦人の覚醒

説 苑

奉仕の心

洞穴からの歌（五十七篇）

〔想 苑〕

我生活の片影（わかき友の死より）

一老婦人のこと

家庭料理講義（前承）

海老名みや子 2

海老名彈正 7

山本邦之助 11

安井 哲子 16

ヘンリー・ヴァンダイク
浅田すま訳 24

野口せい子 35

高畠 てう 41

徳江 道世 43

ある日の偶想

〔詩苑〕

〔短歌〕休戦の祝日に

平和克復の日に（黙想の傍より）

貧乏者

〔創作〕

彼は死んだ（小説）

ブックマンの講話を聞いて

読者欄

○九州の一読者○日高みはる

社告

編輯室より

丘の人 46

野口せい子 49

藤沢 貞雄 51

（アイキン）

松島 穰訳 54

小手川三郎 56

青霞生 61

63

（貞雄） 64

第十一卷 第一号（大正8・1・1）

社説

意義深きクリスマス

教壇

戦後の婦人

説苑

海老名みや子 2

海老名暉正 4

牧者の歌（二十三篇）

大正八年を迎へんとして

随感

静かに誕生日を祝ひたい

初春の祝ひごとに就きて

〔文苑〕

生活の片影より（平和の春）

新らしき年頭に立ちて女学生時代を想ふ

生ける天使（童話）

〔附録〕

聖チェチリア

編輯室にて

ヘンリー・ヴァンダイク

浅田すま訳

（みや子） 8

聖山生 19

高峰 博子 22

野口せい子 26

高峰 博子 32

廣田 花崖 39

ダブル、アイ、キップ

佐々木久訳

（貞雄） 45

第十一卷 第二号（大正8・2・1）

謹告

〔説苑〕

終刊の辞

政治学の立場より男女の同権を述べ

歐洲に旅立んとして

故廣岡女史の告別式に臨みて

〔新刊紹介〕

新女界事務所

巻頭

（藤） 1

吉野 作造 5

海老名みや子 10

安井 哲子 13

17

○『一週一信』廣岡浅子著 婦人週報社発行			
〔教壇〕			
神の子イエス		海老名弾正	18
放蕩者の帰来 (五十一篇)		ヘンリイ、ヴァンダイク 浅田ます訳	22
〔時説〕			
時代は特に如何なる点に婦人の教養を要望する乎			32
○帆足理一郎○渡瀬常吉○吉野作造○内ヶ崎作三郎○野口末彦○山本秀煌○相原一郎介○有田四郎○海老名弾正			
〔想苑〕			
自殺に関する二犠牲者の面影 (日本基督教史の一節)		山本 秀煌	37
女教師Tの手記		高峰 博子	43
平和の家庭		今井 昭綱	49
〔雑録〕			
愛なき夫婦は離縁すべきや否や		一記者	56
編輯室にて		(藤沢)	60

『新女界』刊行一覽表

2 ・ 7	2 ・ 6	2 ・ 5	2 ・ 4	2 ・ 3	2 ・ 2	2 ・ 1	1 ・ 9	1 ・ 8	1 ・ 7	1 ・ 6	1 ・ 5	1 ・ 4	1 ・ 3	1 ・ 2	1 ・ 1	卷 号
																発行年月日
																編輯兼発行者 (主幹)
																主筆
																編輯主任
																印刷人
																頁本文 数
																定価
																備考
																四六倍判(約26×19糎) 發行所 新人社(東京府下北豐島郡巢鴨村大字巢鴨六百六十一番地) 印刷所 齊藤活版所(東京市赤坂区田町五丁目十一番地) 新人社事務所 第一卷第一号 東京市小石川区久堅町八番地 第一卷第二号 東京市小石川区小日向町三丁目九十二番地 〔發行部数 二〇〇〇部〕 〔安井哲子、海老名みや子、元良よね子、大塚尚、野口せい子など編輯にあたる〕 〔野口末彦、せい子夫妻前橋赴任〕

4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8

		45												44					
		・												・					
3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

〔有富虎之助〕

石川区丸山
町四番地
(東京市小)

石川区小日
六向町二ノ二
(東京市小)

石川区小日
六向町一ノ二
(東京市小)

56〔64〕

56

40

10 15

〔子供欄別頁付7頁を含む〕

〔初めて安井哲子巻頭文を休載する〕

〔定価は誤りと思われる〕

菊判(約22×15 糎)

新人社事務所…東京市小石川
区林町四十三番地

5 11	5 10	5 9	5 8	5 7	5 6	5 5	5 4	5 3	5 2	5 1	4 12	4 11	4 10	4 9	4 8	4 7	4 6	4 5	4 4
---------	---------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---------	---------	---------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

											大正 1								
											2								
11 1	10 1	9 1	8 1	7 1	6 1	5 1	4 1	3 1	2 1	1 1	12 1	11 1	10 1	9 1	8 1	7 1	6 1	5 1	4 1

											〔小橋三四子〕								
											〔大塚 楠男〕								

石川宮下
町八番地
(東京都小)

72

12

印刷所 報文社
(東京市麹町区有楽町二丁目
一番地)

〔小橋三四子編輯主任を辞し
社友となる〕

〔増頁定価改訂〕

7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	5
7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
12																		12

						4											3	
7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

〔野口せい子〕

72

80

72 80 72 80

〔安井哲子多忙のため巻頭文
休載〕

9	9	9	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	7	7	7	7	7
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8

		6												5						
		•												•						
3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

大塚
 多摩郡
 東横市
 府中
 尚塚
 豊
 衛
 兵
 番
 二
 源
 十
 百

72	80	72	80	72	80
----	----	----	----	----	----

〔安井哲子が再び巻頭文を海
 老名みや子とともに執筆する
 但し安井哲子の巻頭文はこれ
 を最後とする〕

伝道号

〔安井哲子病院入院第八巻第
 十二号まで休載〕

11	11	10
•	•	•
2	1	12
	8	
	•	
2	1	12
•	•	•
1	1	1
60	58	64